The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	太宰治と詩歌
Author(s)	平, 浩一; 野口, 尚志; 井原, あや 他
Citation	太宰治スタディーズ. 2023, 7, p. 7-89
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/92822
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

太宰治全集第一巻

（担当：平浩一）

「思ひ出」

むかしむかしのそのむかし（1-19）

●「芸者が座敷で演じてみせる、昔話の浦島太郎などを題材にした座興の手踊りの歌詞の一節か。「お伽草紙」（筑摩書房、昭20・10）の「瘤取り」の冒頭近くに、「とにかく、能楽、歌舞伎、芸者の手踊りに到るまで、この浦島さんの登場はおびただしい」と見える。」

▼花田俊典「思ひ出」（『太宰治のレクチュール』二〇〇一・三、双文社出版）

あれは紀のくにみかんぶね（1-19）

●「「かっぽれ」の代表的な歌詞の一節。なお、茨城民謡の磯節にも同じ文句がある。」

▼花田俊典「思ひ出」（前掲）

「葉」

撰ばれてあることの／恍惚と不安と／二つわれにあり（1-185）

ヴェルレーヌ「智恵」（堀口大学『ヴェルレエヌ研究』一九三三・三、第一書房）。

▼参照＝関井光男「太宰治と外国文学あるいは引用の修辞学」（「解釈と鑑賞」一九八五・一一）

メフイストフエレスは雪のやうに降りしきる薔薇の花弁に胸を頬を掌を焼きこがされて往生したと書かれてある。（1-195）

ゲーテ『ファウスト』第二部第五幕。

※森林太郎訳（一九一三・一、冨山房）では、以下のように訳されている。「合唱する天使等（薔薇の花を蒔く。）／色赫ける、／高き香送る薔薇の花よ。［……］メフイストフエレス／ああ。頭が燃える。胸が、肝が燃える。／悪魔以上の火だ。／地獄の火より余程痛い。」

「ファウスト」の翻訳は複数あるが、太宰の参照したのは大正十二年五月刊行の『鷗外全集　第十巻』（鷗外全集刊行会）収録版か。太宰の本文とは一部異なっており、推測の域は出ない。

〝Nevermore〟（1-196）

●渡部芳紀は「ヴェルレーヌの「土星の子の歌」の中に「NEVERMORE」という詩があり、ポーの「大鴉」という詩には〈Nevermore〉と繰り返す鴉が出てくるが、あまり関係ないだろう」と指摘している。

他方で、野口尚志は「「葉」の断章二十三以降が、結婚→妻→病む妻、そして夫婦の危機を思わせる二十六の挿話、という流れになっているのを考えれば、〝Nevermore〟がポーの「大鵜」、そしてその影響を受けたヴェルレーヌの詩の題を意識していることは否定できまい」としている。

▼渡部芳紀「テクスト評釈「葉」」（「國文學」一九六八・九）

▼野口尚志「太宰治「葉」論――〈不安〉にたどり着くまで」（「日本語と日本文学」二〇一二・八）

春ちかきや？（1-201）

●「太宰の「亀の子」と題された句帖に、〈亀の子われに問へ春近きや〉の句があり、それからの転用か。」

▼赤木孝之編『注釈『晩年』抄』（一九九六・五、新典社）

「道化の華」

ここを過ぎて悲しみの市（1-128）（1-136）

ダンテ『神曲』「地獄篇」第三曲。

※翻訳については、安藤宏が「「神曲」のいずれのバージョンを参照していたのかについては定説がなく、それゆえに興味深い問題を投げかけている」として、三つの説を整理している。

第一は、笠原伸夫らが注目した、森鷗外『即興詩人』（一九〇二・九、春陽堂）という説。「こゝすぎてうれへの市に／こゝすぎて嘆の淵に」と訳されている。

第二は、笠原伸夫、渡邊浩史らが注目した、『ダンテ神曲――上田敏未定稿』（一九一八・七、大修館書店）ならびに『上田敏全集 第一巻』（一九二九・九、改造社）という説。「こゝすぎてかなしみの都へ」と訳されている。

第三は、奥村淳、山内祥史らが注目した、生田長江の『世界文学全集 第一巻』、『神曲』（一九三四・一、新潮文庫）という説。「我は悲しみの市への入口なり」と訳されている。

それを踏まえ、安藤宏は「三つの訳が渾然一体となり、太宰独自のモラトリアムの美学に結晶したものと思われる」と指摘している。

▼安藤宏「「道化の華」四題」（『太宰治論』二〇二一・一二、東京大学出版会）

▼参照＝笠原伸夫「なぜ、大庭葉蔵か」（「信州白樺」一九八二・一〇）

▼参照＝渡邊浩史「道化の華」の一つの引用――ダンテ『神曲』「地獄の門」銘文引用に関する翻訳の問題点」（「仏教大学大学院紀要」二〇〇三・三）

▼参照＝奥村淳「太宰治とダンテ『神曲』――新視点からの『めくら草紙』」（『カレイドスコープ――中村志朗教授退官記念論集』一九九五・二、同刊行会）

▼参照＝山内祥史「太宰治作品の典拠資料」（「解釈と鑑賞」一九九九・六）

「猿面冠者」

そもさん何者[……]ぢやないかよ。（1-211）

わたしがあなたに[……]いりませう。（1-220）

もうこれで筆をおきます。[……]オネーギン様。（1-220）

プーシキン「オネーギン」

太宰が参照したのは、米川正夫訳『韻文小説 オネーギン』（一九二七・一二、岩波文庫）か。

▼参照＝石井和夫「風のゆくえ――「こほろぎ嬢」と「猿面冠者」」（「福岡女子大学文学部紀要」二〇〇六・二）

▼参照＝赤木孝之編『注釈『晩年』抄』（前掲）

太宰治全集第二巻（担当：野口尚志）

「HUMAN LOST」

思ひは、ひとつ、窓前花。（2-22）

※「東京八景」（「文學界」一九四一・一）にも登場。中野嘉一は「東京八景」に言及して、太宰が入院した板橋脳病院のコスモスを指すと推測している。

▼参照＝中野嘉一『太宰治――主治医の記録』（一九八〇・七、宝文館出版）

ものかいて扇ひき裂くなごり哉（2-23）

松尾芭蕉『奥の細道』

▼参照＝渡部芳紀「評釈「HUMANLOST」」（『太宰治　心の王者』一九八四・五、洋々社）

ふたみにわかれ（2-23）

蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ（松尾芭蕉『奥の細道』）

▼参照＝渡部芳紀「評釈「HUMANLOST」」（前掲）

あら、／あたし、／いけない／女？［……］いけない？（2-24）

●「「花」の一つの現われとしての「スキートピイちゃん」が唄い出すということだろうが、語り手の男が裏声（女声）で唄う戯れ唄のようになっている。花が擬人化されて女を演じ、その女を男が演じるという多重的な演技となっているが、閉鎖病棟内では当然ながら男女が隔離されていたということも一応思い出しておこう。」

▼山口俊雄「「HUMAN LOST」評釈（一）」（『太宰治研究20』二〇一二・五、和泉書院）

▼参照＝渡部芳紀「評釈「HUMANLOST」」（前掲）

※太宰の自作詩か。

「花一輪。」［……］ありがたう、よ、ありがたう！（2-26）

●「「花」のイメージのリレーが続く。途中で「ひとりじめ」する「ぢいさん」が挟まるが、「白いひげの羊飼ひのぢいさん」として、キリストにもつながる人々の導き手としての良き羊飼いのイメージと知恵ある老人のイメージが含意されているせいか、「いいんだよ」とやり過ごされ、全体として皆で力を合わせて「やつと咲かせた

花一輪」を喜ぶ「詩」（？）となっている。「サインを消せ」「合作」「ありがたう、よ、ありがたう！」と、感謝とともに個を集団の中に解消する祝福のイメージ。」

▼山口俊雄「「HUMAN LOST」評釈（一）」（前掲）

※太宰の自作詩か。

あかつきばかり憂きものはなし（2-34）

有明のつれなく見えし別より暁ばかりうきものはなし（壬生忠岑『古今和歌集』恋六二五・『小倉百人一首』三〇）

一日。
実朝をわすれず。

伊豆の海の白く立つ浪がしら
塩の花ちる。
うごくすすき。（2-43）

※太宰の自作歌か。「鉄面皮」（「文學界」一九四三・四）に言及あり。

「梨花一枝。」（2-45）

白居易「長恨歌」で楊貴妃の容貌をたとえる。

▼参照＝渡部芳紀「評釈「HUMANLOST」」（前掲）

▼参照＝山口俊雄「「HUMAN LOST」評釈（五）」（『太宰治研究24』二〇一六・五、和泉書院）

柿一本の、生れ在所や、さだ九郎。（2-48）

●「忠臣蔵五段目に登場する悪人、斧定九郎。」

▼参照＝渡部芳紀「評釈「HUMANLOST」」（前掲）

▼参照＝山口俊雄「「HUMAN LOST」評釈（五）」（前掲）

※太宰の自作句か。

「黄金風景」

海の岸辺に緑なす樫の木、その樫の木に黄金の細き鎖のむずばれて――プウシキン――（2-201）

浜辺に緑の樫の木あり、／黄金の鎖その樫にかゝる、（外村史郎訳『プウシキン全集（第五巻）』一九三七・二、改造社）

※プーシキンの物語詩「ルスランとリュドミラ」の「プロローグ」の一節。後半に「岸辺に緑なす樫の木を見、」（前掲書）とあり、太宰は訳文を編集して用いたか。

「富嶽百景」

金剛石も磨かずば、といふ唱歌を（2-224）

金剛石も磨かずば　珠の光りはそはざらむ／人もまなびて後にこそ　まことの徳は顕はるれ／時計の針のたえまなく　めぐるが如く時のまの／日かげ惜みて励みなば　いかなる業か成ざらむ

▼参照＝『尋常高等学校唱歌集』（一九一二・五、岡村盛花堂）

※昭憲皇太后による「金剛石」冒頭の一節。「金剛石」は「水は器」（太宰「めくら草紙」に関連）とともに華族女学校に下賜され、のちに奥好義の作曲によって尋常小学校唱歌とされた。

●「「金剛石」の内容は努力の重要さを説いたものとなっており、仕事が進まず寝転んでいる「私」の姿とは明確な対照性を持っている」

▼若松伸哉「再生の季節と作家」（『わたしと世界を象ることば』二〇一九・一〇、翰林書房）

「女生徒」

この道は、いつか来た道（2-234）

この道はいつか来た道、／ああ、さうだよ、／あかしやの花が咲いてる。

▼北原白秋「この道」（「赤い鳥」一九二六・八→『月と胡桃』一九二九・六、梓書房）

▼参照＝『白秋全集26』（一九八七・四、岩波書店）

かへかへろと何見てかへる、畠の玉ねぎ見い見いかへろ、かへろが鳴くからかへろ。（2-249）

北原白秋作詞・山田耕筰作曲「かへろかへろと」の一節。

※「かへかへろと／何見てかへる／寺の築地の／影を見い見いかへろ」が一番で、「畠の玉ねぎ」は四番の歌詞。なお、一九二六年発売のレコード（ニッポノホン発売・歌唱は藤原義江）では「畠の玉ねぎ」、「見い見いかへろ」と歌うが、白秋の童謡集（『月と胡桃』一九二九・六、梓書房）ではそれぞれ「葱の小坊主」、「見い見いかへる」となっている。（レコードは国立国会図書館デジタルコレクションで聴取）白秋の詩の初出は「童話」（一九二五・四）。

▼参照＝『白秋全集26』（前掲）

それなのに、ああ、それなのに（2-255）

星野貞志作詞・古賀政男作曲「あゝそれなのに」（一九三六・一二、テイチク）

▼参照＝古茂田信男他編『日本流行歌史〈戦前編〉』（一九八一・一、社会思想社）

おまえ百まで、わしや九十九まで。（2-263）

●「あとに続けて「共に白髪の生える迄」という俗謡」

▼前田勇編『江戸語大辞典』（一九七四・一一、講談社）

「懶惰の歌留多」

生くることにも心せき、感ずることにも急がるる。（2-276）

生くることにも心せき、感ずることも急がるる

▼プーシキン、米川正夫訳『韻文小説　オネーギン』（一九二七・一一、岩波文庫）

牢屋は暗い。（2-278）

夜でも昼でも牢屋は暗い／いつでも鬼奴が窓から覗く

▼参照＝「ドン底の歌」（『プロレタリア歌曲集』一九三〇・六、無産社）

※マキシム・ゴルキイ作・小山内薫訳「夜の宿（どん底）」の第二幕と第四幕で歌われる歌。

▼参照＝『世界近代劇叢書第二輯　夜の宿』（一九二五・一、金星社）

かみなりに家を焼かれて瓜の花。（2-283）

雷に小家は焼れて瓜の花（与謝蕪村）

蛍の光、窓の雪。（2-284）

蛍のひかりまどのゆき　ふみ読む月日かさねつゝ／いつしか年もすぎのとを　あけてぞけさは別れ行く／とまるも行もかぎりとて　かたみにおもふちよろづの／心のはしをひとことに　さきくとばかりうたふなり／つくしのきはみゝちの奥／海山とほくへだつとも／其のまごゝろはへだてなく／ひとつにつくせ国のため／千島のおくもおきなはも／やしまのうらのまもり也／至らんくにゝいさをしく　勉めよわがせつゝがなく

▼参照＝『尋常高等学校唱歌集』（一九一二・五、岡村盛花堂。「ゝ」「ゝ」はママ）

兵を送りてかなしかり。（2-284）

一隊の兵を見送りて／かなしかり／何ぞ彼等のうれひ無げなる（石川啄木『一握の砂』一九一〇・一二、東雲堂書店）

こいしくば、たづね来て見よいづみなる、しのだの森のうらみくずの葉。（2-286）

闇の夜の、にほひ山路たどりゆき、かな哭く声に消えまよひけり。（2-287）

わぎもこを、いとほし見れば青鷺や、言の葉なきをうらみざらまし。（2-287）

※「こいしくば」は古浄瑠璃「信田妻」で安倍保名と子をもうけた狐（葛の葉）が正体を悟られて信田森に帰る際、障子に書き残した歌。この子がのちの安倍晴明となる。浄瑠璃「蘆屋道満大内鑑」にも登場する。

またこの三首は太宰の「むかしの亡者」（「かむろ」一九三八・一一）に幽霊のつくった歌として引用されている。

▼参照＝大野章「信田妻」（志村有弘・諏訪春雄編『日本説話大事典』二〇〇〇・六、勉誠出版）

▼参照＝須田喜代次「太宰治「むかしの亡者」ならびに掲載誌『かむろ』をめぐる一考察」（「大妻国文」一九九六・三）

明月や、座に美しき顔もなし。（2-289）

名月や座に美しき顔もなし（松尾芭蕉）

姥捨山のみねの松風。（2-290）

月見れば衣手さむしさらしなや姥捨山のみねの秋風（源実朝『金槐和歌集』二八四）

「秋風記」

立ちつくし／ものを思へば、／ものみなの物語めき、（生田長江）（2-292）

たちつくしものをおもへば／ものみなのものがたりめき／わがかたにつきかたぶきぬ（生田長江「たちつくし」、『現代日本文学全集　第二十八篇』一九三〇・一、改造社）

君よ、知るや、（2-292）

※「君よ知るや南の国」はアンブロワーズ・トマ作曲の歌曲の表題であり歌詞の一節。オペラ「ミニョン」の中で歌われる。ゲーテ「ウィルヘルム・マイスターの修業時代」中の詩をジュール・バルビエとミシェル・カレが脚色した。なお、この詩の本邦初訳は鷗外『於母影』の「ミニヨンの歌」である。

▼参照＝『最新名曲解説全集　第18巻　歌劇Ⅰ』（一九八〇・三、音楽之友社）、『鷗外全集著作篇第一巻』（一九三八・二、岩波書店）

「新樹の言葉」

里のおみやに何もろた、でんでん太鼓に（2-326）

坊やはよい子だ　ねんねしな／ねんねのお守は　何処へ行た／あの山越えて　里へ行た／里のお土産に　何もろた／でんでん太鼓に　笙の笛／起上り小法師に　振り鼓（町田嘉章・浅野建二編『わらべうた』一九八三・一二、岩波書店）

●「殆ど全国に分布するこの唄は、わが国の代表的な子守唄の一といえる」（『わらべうた』前掲）

「葉桜と魔笛」

待ち待ちて　ことし咲きけり　桃の花　白を聞きつつ　花は紅なり（2-357）

※太宰の自作歌か。

「八十八夜」

（夏も近づく。――）（2-399）

夏も近づく八十八夜／野にも山にも若葉が茂る／「あれに見えるは茶摘じゃないか／あかねだすきに菅の笠」（「茶摘」文部省唱歌）

▼参考＝古茂田信男他編『日本流行歌史〈戦前編〉』（一九八一・一、社会思想社）

※単行本『皮膚と心』（一九四〇・四、竹村書房）収録版では「諦めよ、わが心、獣の眠りを眠れかし。（C・B）」となっている。これはシャルル・ボードレール『悪の華』の中の詩の一節。村上菊一郎訳「虚無の味わひ」には「諦めよ、わが心、獣の眠りに沈めかし。」（『悪の華』一九三八・八、版画荘）、大宰徹雄訳「虚無の味」には「諦めよ、わが心、獣のごとき睡りの中に眠れかし。」（『新訳ボオドレエル詩集』一九四〇・二、京文社書店）とある。

――山よりほかに、……（2-408）

もろともにあはれと思へ山桜花より外に知る人もなし（大僧正行尊『小倉百人一首』六十六）

太宰治全集第三巻（担当：井原あや）

「おしやれ童子」

落人の借衣すずしく似合ひけり。（3-53）

※太宰の自作か。

この柄は、このごろ流行と借衣言ひ。（3-53）

※太宰の自作か。

その袖を放せと借衣あわてけり。（3-53）

※太宰の自作か。

借衣すれば、人みな借衣に見ゆる哉。（3-53）

※太宰の自作か。

「善蔵を思ふ」

衣錦還郷（3-69、3-76）

『南史』

衣錦之栄（3-70）

歐陽脩『昼錦堂記』

人間到るところ青山。（3-79）

月性「将東游題壁」

※江戸時代後期の僧・月性による漢詩の一節。

▼参照＝月性「将東游題壁」（月性著、天地哲雄編『清狂遺稿 上』田中治兵衛発行、一八九二・一）

「俗天使」

わたしは、鳥ではありませぬ。また、けものでもありませぬ。（3-82）

※本文では「私」がこの歌について「家の者」に尋ねると「蝙蝠の歌でせう。鳥獣合戦のときの唱歌でせう」と答えている。「蝙蝠」という題の唱歌は複数あり、『唱歌集大全　巻之一』（編集兼発行人後藤治郎平、一九〇三・一二）収録の唱歌「蝙蝠」（作詞者・作曲者の記載なし）に「鳥と、けものと、／なかたがへ、／いくさ、おこりし、／其時に、」［……］「鳥に、にたれど、／鳥ならず、／けものに、しては、／羽がある」という歌詞がある。ほかに、小松耕輔・梁田貞・葛原菡編『大正少年唱歌』（一九三一・五、目黒書店）に収録されている唱歌「蝙蝠」（小松耕輔作曲。作詞者の記載なし）には、「鳥かと見れば、変な羽根、」［……］「鼠にしては尾が無くて、」という歌詞がある。いずれも内容は類似しているが、「俗天使」の「蝙蝠の歌」は、当時の唱歌「蝙蝠」を踏まえた太宰の創作か。

▼参照＝編集兼発行人後藤治郎平『唱歌集大全　巻之一』（一九〇三・一二）

▼参照＝小松耕輔・梁田貞・葛原菡編『大正少年唱歌』（一九三一・五、目黒書店）

「美しい兄たち」

紅燈に行きてふたたび帰らざる人をまことのわれと思ふや。（3-93）

吉井勇「紅燈行」

※「紅燈行」では「紅燈のちまたに往きてかへらざるひとをまことのわれと思ふや」。

▼吉井勇「紅燈行」（『東京紅燈集』一九一六・五、新潮社）

あかいカンナの花でした。私の心に似てゐます。（3-96・97）

※太宰の自作か。「美しい兄たち」の語り手である「私」の三兄が雑誌「青んぼ」に発表した叙情詩。

矢車の花いとし。一つ、二つ、三つ、私のたもとに入れました。（3-96）

※太宰の自作か。前掲「あかいカンナ」と同じく、語り手である「私」の三兄が雑誌「青んぼ」に発表した叙情詩。

「鷗」

イマハ山中、イマハ浜、イマハ鉄橋、ワタルゾト思フ間モナクトンネルノ、闇ヲトホツテ広野ハラ、（3-109）

「汽車」文部省唱歌

※「鷗」では「汽車」の一番を引用している。歌詞全体は『尋常小学唱歌帖　上』等で確認できる。

▼参照＝編纂兼発行人内藤重蔵『尋常小学唱歌帖　上』（一九一二・一〇）

かみなりに家を焼かれて瓜の花。（3-113）

『蕪村句集』

※『蕪村句集』では「雷に小家は焼れて瓜の花」。

▼参照＝几董「蕪村句集」（勝峰晋風『日本俳書大系』第八巻　蕪村一代集、一九三四・四、春秋社）

イマハ山中、イマハ浜、イマハ鉄橋ワタルゾト思フマモナク、（3-124）

「汽車」文部省唱歌（前掲）

「走れメロス」

本文全体（3-164～178）

シルレル（シラー）「人質」

▼小栗孝則訳「人質　譚詩」（『新編シラー詩抄』一九三七・七、改造社〔改造文庫〕）

※「走れメロス」については、本文末尾に「（古伝説と、シルレルの詩から。）」と記されているように、シルレル（シラー）の詩「人質」（「保証」と訳される場合もある）とイタリアの伝説を踏まえて作られている。典拠に関する先行研究は数多くあり、そうした研究成果については、山内祥史が「解題」（『太宰治全集３』一九八九・一〇、筑摩書房）に詳細に整理し記しているので、ここでは、先行研究の数点を示した。角田旅人は「「走れメロス」材源考」（「香川大学一般教育研究」一九八三・一〇）で、小栗孝則訳『新編シラー詩抄』を引用した上で「小栗訳「人質」とその註解とには、人名・地名・イタリーの伝説に由来すること等、「走れメロス」の材料は全て揃って出て来ている」と、その典拠を指摘した。なお、メロスをはじめとする登場人物名の異同については、近藤周吾が「「走れメロス」評釈（一）」（山内祥史編『太宰治研究15』二〇〇七・六、和泉書院）で整理している。また、松本和也は「ドイツ文化との共振／〝権力強化の物語〟――「走れメロス」」（『昭和一〇年代の文学場を考える――新人・太宰治・戦争文学』立教大学出版会、二〇一五・三）において、「昭和一〇年代に入ってから、ドイツでのシラーをめぐる動向が積極的に日本に紹介」されていたと、当時のシラー受容を明らかにした。

▼参照＝秋元喜久雄（秋元蘆風）訳『シルレル詩集　増補改版』（一九一三・一二増補改版、東亜堂書房）

▼参照＝秋元喜久雄（秋元蘆風）『シルレル詩選　註釈』（一九二七・四、南江堂書店）

▼参照＝角田旅人「「走れメロス」材源考」（「香川大学一般教育研究」一九八三・一〇）

▼参照＝山内祥史「解題」（『太宰治全集３』一九八九・一〇、筑摩書房）

▼参照＝九頭見和夫「太宰治のシラー受容――「走れメロス」の素材について」（『太宰治と外国文学――翻案小説の「原典」へのアプローチ』二〇〇四・三、和泉書院）

▼参照＝近藤周吾「「走れメロス」評釈（一）」（山内祥史編『太宰治研究15』二〇〇七・六、和泉書院）
▼参照＝近藤周吾「「走れメロス」評釈（二）」（山内祥史編『太宰治研究16』二〇〇八・六、和泉書院）
▼参照＝近藤周吾「「走れメロス」評釈（三）」（山内祥史編『太宰治研究17』二〇〇九・六、和泉書院）
▼参照＝近藤周吾「「走れメロス」評釈（四）」（山内祥史編『太宰治研究18』二〇一〇・五、和泉書院）
▼参照＝近藤周吾「「走れメロス」評釈（五）」（山内祥史編『太宰治研究19』二〇一一・六、和泉書院）
▼参照＝松本和也「ドイツ文化との共振／〝権力強化の物語〟――「走れメロス」」（『昭和一〇年代の文学場を考える――新人・太宰治・戦争文学』二〇一五・三、立教大学出版会）
▼参照＝奥村淳「太宰治「走れメロス」について――日本における〈ダモン話〉の軌跡」（「山形大学紀要（人文科学）」二〇一七・二）
▼参照＝佐野幹『「走れメロス」のルーツを追う――ネットワークグラフから読む「メロス伝説」』（二〇二一・一〇、大修館書店）

「女の決闘」

ファウストは、この人情の機微に就いて、わななきつつ書斎で独語してゐるやうであります。（3-204）

▼ゲーテ『ファウスト』第一部「書斎」
※森林太郎訳『ファウスト』「悲壮劇の第一部」「書斎」（『鷗外全集10』一九二三・五、鷗外全集刊行会）を踏まえたものか。
▼参照＝森林太郎『鷗外全集10』（一九二三・五、鷗外全集刊行会）

「古典風」

人のこころも／まこと信じてもらふには／十字架に／のぼらなければ／なるまいか（3-247）

●「出典ということで言えば、Yvan Goll の詩は〝Metro de la mort〟（一九三六年）の'Fatalement'からの引用である。ただし、太宰治がどの書に依ったかは不明。」

▼渥美孝子「『古典風』」（神谷忠孝・安藤宏編『太宰治全作品研究事典』一九九五・一一、勉誠社）

●水川布美子は「堀口大學が『文藝汎論』昭和十三年五月（Vol.8-5）に「イヴァン・ゴル三章―個人、自転車のり、不幸にも」と題して翻訳しているが、旧稿である「貴族風」にも」記されており、旧稿執筆時期から考えて「これを参看した可能性は否定される」と指摘している。

▼水川布美子「太宰治「古典風」の一考察」（「皇學館論叢」二〇〇三・一〇）

●「この詩はイヴァン・ゴルの『死のメトロ』（Metro de la mort、一九三六）という詩集に収められた「不幸にも」からの引用である。ゴルの詩をいち早く日本語に翻訳したのは堀口大学である。水川布美子の検証によれば、「不幸にも」の日本語訳が最初掲載されたのは一九三八年五月の『文藝汎論』（第八巻第五号）である。その前年に執筆された「貴族風」にもこの詩が引用されたため、太宰が堀口訳を参照した可能性はないとされる。／ところが、この引用は堀口訳に酷似している。［……］「葉」のエピグラフも堀口訳を採用したことから推論として考えられるのは、おそらく、これもゴルの訳詩が正式に雑誌に掲載される前に、太宰はなんらかのルートで堀口訳を入手したかもしれない。いずれにしても、現段階では、断言することが出来ない。」

▼唐雪「太宰治「古典風」のアヴァンギャルド性」（「研究論集」二〇一六・一）

「盲人独笑」

本文中の和歌（3-250、254～269）

▼葛原凾編『葛原勾当日記』（一九一五・一一、博文館）

※「盲人独笑」の「はしかき」に「葛原勾当日記を、私に知らせてくれた人は、劇作家伊馬鵜平君である」とあるように、太宰は伊馬鵜平から『葛原勾当日記』を入手した。「盲人独笑」には、エピグラフのほか、「はしかき」

の後に続く「葛原勾当日記。天保八酉年。」から始まる「日記」の「たちかゑる。としのはしめは。なにとなく。しつがこころも。あらたまりぬる。」（「正月一日。同よめる。」）など、多数の和歌が書き記されている。「盲人独笑」と実際の『葛原勾当日記』との対照については、岡村知子「「盲人独笑」論――自己と他者との〈あいだ〉をめぐって――」（『太宰治の表現と思想』二〇一二・四、双文社出版）に付された「「盲人独笑」／『葛原勾当日記』対照表」に、先行論文を踏まえた詳細な対照表がまとめられている。なお、「盲人独笑」に記された和歌と箏曲教授に着目した論として本誌掲載の吉岡真緒「『葛原勾当日記』から「盲人独笑」へ――「盲人独笑」の現代性」がある。

▼参照＝山崎正純「「盲人独笑」●「単一表現」の試み」（『太宰治1』一九八五・七、洋々社）

▼参照＝藤原耕作「太宰治「盲人独笑」論」（『太宰治研究6』一九九九・六、和泉書院）

▼参照＝水川布美子「太宰治「盲人独笑」試論」（「神女大国文」二〇〇四・三）

▼参照＝岡村知子「「盲人独笑」論――自己と他者との〈あいだ〉をめぐって――」（『太宰治の表現と思想』二〇一二・四、双文社出版）

▼参照＝高橋秀太郎「「盲人独笑」と『葛原勾当日記』」（『太宰治研究20』二〇一二・五、和泉書院）

▼参照＝吉岡真緒「『葛原勾当日記』から「盲人独笑」へ――「盲人独笑」の現代性」（「太宰治スタディーズ7」二〇二三・九）

「一燈」

大君の辺にこそ、（3-305）

海行かば／水漬く屍／山行かば／草生す屍／大君の／辺にこそ死なめ／顧みはせじ（『萬葉集』巻一八、四〇九四番）

●「「日本のひと全部」について、すでに昭和一二年の国民精神総動員運動に関わった信時潔作曲「海ゆかば」として戦時下に再利用されていた和歌を引用した姿勢の表明である。」

▼松本和也「戦時下の芸術家（宣言）――太宰治「一燈」試論」（「太宰治スタディーズ6」二〇一六・六）

※『萬葉集』に収録された大伴家持の歌。一九三七年に信時潔が作曲を担当し、戦時下に用いられた。

▼参照＝「萬葉集」（小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳『新編日本古典文学全集9』一九九六・八、小学館）

さして行く笠置の山、（3-305）

指て行笠ぎの山を出しより雨が下には隠家もなし（『太平記』巻三「笠置城没落の事」）

※後醍醐天皇が藤房・季房と落ちのびて行く際に詠んだ歌。

▼参照＝「太平記」（長谷川端校注・訳『新編日本古典文学全集54』一九九四・一〇、小学館）

鳴かぬ蛍は、（3-305）

恋に焦がれて鳴く蝉よりも　鳴かぬ蛍が身を焦がす（『山家鳥虫歌』　巻之上　山城国風）

※『山家鳥虫歌』は、一七七二年刊の歌謡集。

▼参照＝「山家鳥虫歌」（友久武文・山内洋一郎・真鍋昌弘・森山弘毅・井出幸男・外間守善校注『新日本古典文学大系62』「田植草紙　山家鳥虫歌　鄙廼一曲　琉歌百控」一九九七・一二、岩波書店）

「乞食学生」

大貧に、大正義、望むべからず。（3－327）

※フランソワ・ヴィヨン著、佐藤輝夫訳『大遺言書』（一九四〇・三、弘文堂書房〔世界文庫〕）の「大貧に大正義望むべからず」をふまえたか。

▼参照＝フランソワ・ヴィヨン著、佐藤輝夫訳『大遺言書』（一九四〇・三、弘文堂書房〔世界文庫〕）

●「おそらく佐藤輝夫訳「大遺言書」（昭和十五年三月、弘文堂書房、世界文庫）でよんだのではないか。」

▼山敷和男「ヴィヨンの妻論」（文学批評の会編『批評と研究太宰治』一九七二・四、芳賀書店）

●「現時点では、山敷和男の推測が妥当といってよかろう。」

▼山内祥史「解題」（『太宰治全集3』一九八九・一〇、筑摩書房）

●「「乞食学生」には、冒頭に掲げられた「大貧に、大正義、望むべからず」のエピグラフを含め、第一回の「若き頃……」、第六回の「青年よ……」と「ああ、残念……」の合計四個所にフランソワ・ヴィヨンの詩句が引用され、ヴィヨンに対する太宰の関心の高さが感じられる。」

▼九頭見和夫「「乞食学生」と外国文学」（『太宰治と外国文学――翻案小説の「原典」へのアプローチ――』二〇〇四・三、和泉書院）

●「「乞食学生」全体で見ると太宰は冒頭のエピグラフを含め、四箇所にわたってヴィヨン詩句を引用している。連載回で言えば第一回（エピグラフを含む）・第六回において引用しており、さながらヴィヨンで始まりヴィヨンで終わるというような構成である。」

▼廣川歩実「太宰治「乞食学生」におけるフランソワ・ヴィヨンの影響」（「富大比較文学」二〇一七・三）

若き頃、世にも興ある驕児なり／いまごろは、人喜ばす片言隻句だも言へず／さながら、老猿／愛らしさ一つも無し／人の気に逆らふまじと黙し居れば／老いぼれの敗北者よと指さされ／もの言へば／黙れ、これ、恥を知れよと袖をひかれる。（3－334）

※フランソワ・ヴィヨン著、佐藤輝夫訳『大遺言書』（一九四〇・三、弘文堂書房〔世界文庫〕）の「若き頃には面白い驕児であつたが、／いま頃は人喜ばす愉快なる言葉も言へず／老猿が常に不快で愛らしき／渋面一つ出来ないと全く同じ。／人の気に逆らふまじと黙つてゐれば、／老耄れの気違ひだとも思はれるし、もの言へば／黙れ、こりや戯言いふなと叱られる。」をふまえたか。

▼参照＝フランソワ・ヴィヨン著、佐藤輝夫訳『大遺言書』（一九四〇・三、弘文堂書房〔世界文庫〕）

▼山敷和男「ヴィヨンの妻論」（前掲）

▼山内祥史「解題」（前掲）

▼九頭見和夫「「乞食学生」と外国文学」（前掲）

▼廣川歩実「太宰治「乞食学生」におけるフランソワ・ヴィヨンの影響」（前掲）

ワグネル君、／正直に叫んで、／成功し給へ。／しんに言ひたい事があるならば、／それをそのまま言へばよい。（3－353）

ゲーテ『ファウスト』第一部「夜」

●「「乞食学生」に引用された個所は、『ファウスト』第一部第一場の「夜」の場面であることは確実であるが、引用された文と太宰が参看可能な森鷗外等の翻訳の文とが必ずしも類似しているとは言い難く、いずれの翻訳からの引用なのか断定は困難である。」

▼九頭見和夫「「乞食学生」と外国文学」（前掲）

「青年よ、若き日のうちに享楽せよ！」／と教へし賢者の言葉のままに／振舞うた我の愚かさよ。／（悔ゆるともいまは詮なし）／見よ！　次のページにその賢者／素知らぬ顔して、記し置きける、／「青春は空に過ぎず、しかして、／弱冠は、無知に過ぎず。」（3－370）

※フランソワ・ヴィヨン著、佐藤輝夫訳『大遺言書』（一九四〇・三、弘文堂書房〔世界文庫〕）の「《倅よ若き日のうちに享楽せよ！》と／宣うた賢者の言葉をそのままに／振舞うたことの愚かさよ。／（悔ゆるともいまは詮なし）／然し見よ！　他の場所ではその賢者／重ねて曰く、その言葉そのまま引けば、《青春は空に過ぎず／若冠は無知に過ぎず》と。」をふまえたものか。

▼参照＝フランソワ・ヴィヨン著、佐藤輝夫訳『大遺言書』（一九四〇・三、弘文堂書房〔世界文庫〕）

▼山敷和男「ヴィヨンの妻論」（前掲）

▼九頭見和夫「「乞食学生」と外国文学」（前掲）

▼廣川歩実「太宰治「乞食学生」におけるフランソワ・ヴィヨンの影響」（前掲）

ああ、残念！　あの狂ほしい青春の頃に、我もし学にいそしみ、風習のよろしき社会にこの身を寄せてゐたならば、いま頃は家も持ち得て快き寝床もあらうに。ばからしい。悪童の如く学び舎を叛き去つた。いま、そのことを思ひ出す時、わが胸は、張り裂けるばかりの思ひがする！（3-371）

※フランソワ・ヴィヨン著、佐藤輝夫訳『大遺言書』（一九四〇・三、弘文堂書房〔世界文庫〕）の「憾みなん、ああ！　狂しい青春の頃に／学にいそしみ風習のよろしき社会に／わが身をば寄せてゐたればいま頃は／家も持ち得て快よき寝床もあらうに。愚しや　悪童のごとく学び舎を／叛き去つた。この文をいま草しつつ／このことを思ひ出すときわが胸は／張り裂くばかりの思ひがする！」をふまえたか。

▼参照＝フランソワ・ヴィヨン著、佐藤輝夫訳『大遺言書』（一九四〇・三、弘文堂書房〔世界文庫〕）

▼山敷和男「ヴィヨンの妻論」（前掲）

▼山内祥史「解題」（前掲）

▼九頭見和夫「「乞食学生」と外国文学」（前掲）

▼廣川歩実「太宰治「乞食学生」におけるフランソワ・ヴィヨンの影響」（前掲）

ああ消えはてし　青春の／愉楽の行衛　今いづこ／心のままに　興じたる／黄金の時よ　玉の日よ／汝帰らず　その影を／求めて我は　歎くのみ／ああ移り行く世の姿／ああ移り行く世の姿［……］勉めの日にも　嬉戯の／つどひの日にも　輝きつ／古りたる殻は　消ゆるとも／実こそは残れ　我が胸に／その実を犇と護らなん／その実を犇と護らなん

（3-376～378）

マイアーフェルスター著、番匠谷英一訳『アルト　ハイデルベルク』（一九三五・三、岩波書店〔岩波文庫〕）

※マイアーフェルスター著、番匠谷英一訳『アルト　ハイデルベルク』では、「あゝ消えはてし　青春の／愉楽の行衛　今いづこ／心のまゝに　興じたる／黄金の時よ　玉の日よ／汝帰らず　その影を／求めて我は　歎くのみ／あゝ移り行く世の姿／あゝ移り行く世の姿［……］勉めの日にも　嬉戯の／つどひの日にも　輝きつ／古りたる殻は　消ゆるとも／実こそは残れ　我胸に／その実を犇と護らなん／その実を犇と護らなん」（マイアーフェルスター著、番匠谷英一訳『アルト　ハイデルベルク』一九三五・三、岩波書店〔岩波文庫〕）。

●「「乞食学生」の第六回、夢から覚醒する直前「太宰」は、佐伯、熊本の二人の高校生とともにマイヤー＝フェルスターの『アルト・ハイデルベルク』の歌を高吟する。この歌が、番匠谷英一訳の『アルト・ハイデルベルク』（昭和一〇年、岩波文庫）からの引用であることは、翻訳の文と非常に類似していることなどによりほぼ間違いないと判断される。」

▼九頭見和夫「「乞食学生」と外国文学」（前掲）

太宰治全集第四巻（担当：大國眞希）

「みみづく通信」

荒海や佐渡に、と口ずさんだ芭蕉の傷心が（4-23）

荒波や佐渡に横たふ天の川（松尾芭蕉「奥の細道」）

●「絶海の孤島であるということと流人の島であるということは「死ぬほど淋しいところ」というイメージにつながる得る。そして、近世の金脈が発見されて以後は、無宿者らが労働力として佐渡に流されることとなったが、彼ら広義の流人たちの金山における悲惨な運命が、「地獄」「死に神」のイメージを引き寄せていると考えるのが妥当である」。また、同時代の芭蕉観、紀行文という形式にも留意すべき。

▼藤原耕作「太宰治「佐渡」論」（「敍説Ⅲ」二号、二〇〇八・二）

▼参照＝「栗原丈和『みみづく通信』（『太宰治全作品事典』一九九五・一一、勉誠社）

みみづくの、ひとり笑ひや、秋の暮（4-26）

其角「いつを昔」

岡倉谷人『評釈　其角の名句』（一九二八・九、資文堂書店）か？

●「自らをみみずくと見なすとき、旅に出たという感興は多少ともあり、また何か滑稽味をただよわせるところのある自分を意識したのに相違ない。それには自嘲や矜持もまじり、其角の独り笑いの句を思い出すことになったのであろう」。其角が「芭蕉の没後その生活にも乱れを生じ、俳諧の道も師に背く点」があったこともまた引用に関わる。

※題名の「みみづく通信」へと繋がる重要な句

▼清田文武「太宰治「みみづく通信」「佐渡」論」（『太宰治研究7』二〇〇〇・三、和泉書院）

「佐渡」

水底を見て来た顔の水鴨かな（4-30）

内藤丈草「丈草発句集」

佐渡は寝たかよ灯が見えぬ（4－30）

民謡「佐渡おけさ」

「千代女」

雪は鵝毛に似て飛んで散乱す（4－65）

白居易『和漢朗詠集』

※この有名な漢詩の一節は、たとえば謡曲「鉢木」でも引用される。没落した佐野源左衛門と沢田先生を重ねることで見えてくるともある。のちに登場する「ほととぎす、ほととぎすとて明けにけり、と呟き、なるほどねえ、うまく作ったものだ」とひとりで感心している母の様子は、白居易を引用し、感心する沢田先生の姿と響き合う。

ほととぎすほととぎすとて明けにけり（4－68）

岸本調和「時鳥々々とて寝入りけり」

「ろまん燈籠」

あの子の髪は、金の橋

あの子の髪は、虹の橋（4－28）

※先行研究によって指摘されている材源とされる「野茜苣」（『グリム童話集（一）』一九二九・一、岩波文庫）に相当する詩句は見当たらない。但し、本文のなかに前後改行、三字下げで詩句のように繰り返す形式は、グリム童話集にも見られ、その形式を踏襲していると考えられる。ちなみに「野茜苣」でそのような形で繰り返されてい

るのは、『ラプンツェルや、ラプンツェル、／お前の毛髪（かみのけ）さげとくれ』とその変奏である。

▼園田美由紀「太宰治『ろまん燈籠』の背景」（「国文瀬名」五、一九八四・六）

▼横山総彦「太宰治「ろまん燈籠」材源考」（「金沢大学語学・文学研究」二六、一九九七・七）

「新ハムレット」

花嫁。〔……〕駈けめぐる！（4-226～232）

クリスチナ・ロセッティ「時と亡霊」（『クリスチナ・ロセッティ詩抄』一九四〇・六、岩波文庫）

●「亡霊の嘆き、怒り、嫉妬の苦しみ――太宰の描く亡霊の方が、はるかに怨念深くさ迷っている」。「シェクスピアの劇中劇は、ハムレットの疑惑をそのまま確かめる直接的な内容であった」のに対し、「新ハムレット」では「亡霊の情念を前面に押し出す、暗喩的な朗読劇に仕立て上げた」。

▼宮地弓子「新ハムレット論」（『太宰治研究9』二〇〇一・六、和泉書院）

「風の便り」

友みなわれより偉く見える日は、花を買ひ来て妻と楽しんでゐるやうな、（4-265）

石川啄木『一握の砂』（一九一〇・一二、東雲堂書店）

「新郎」

山茶花の花びらは桜貝。音をたてて散つゐる。（4-335）

●この引用箇所が続く前の、冒頭部分は「一日一日を、たつぷり生きていくより他は無い。明日のことを思ひ煩ふ

な。明日は明日みづから思ひ煩はん。けふ一日を、よろこび、努め、人には優しくして暮したい。青空もこのごろは、ばかに綺麗だ」という聖書を髣髴とさせる句と青空が印象的に登場する。「新郎」の最後にある「綺麗」な「青空」は「けふ一日」を清新なものとして感受する「私」の心象の象徴であり、戦後、太宰が「空が青い」ことには「なんの意味もない」が、象徴はそういうものだと書く、その先駆形である。精神な「けふ一日」の発見が、「青空もこのごろは、ばかに綺麗だ。」と対をなす「舟を浮かべたいくらゐ綺麗だ」と同語反復の一行を挟んで繰り返され、「山茶花」の落花を、「桜貝」が「音たてて散つてゐる」と表現する修辞は、「視覚と聴覚を複合させた抒情的な比喩」。

▼石井和夫「「おのづから」と「無心」の発見――戦時下の太宰治」（「香椎潟」五三、二〇〇七・一二）

私はいま、ペンを置いて、「その火を絶やすな」といふ歌を、この学校に一つしかないオルガンで歌ひたいと思ひます。（4-342）

歌謡。北原白秋作詞。

「十二月八日」

敵は幾千ありとも、などといふ古い古い軍歌まで飛び出して来る始末なので、（4-352）

山田美妙「戦景大和魂」（同編『新体詞選』一八八六・八、香雲書屋）↓軍歌

我が大君に召されたあるう、と実に調子のはづれた歌をうたひながら、（4-357）

歌謡「出征兵士を送る歌」

●「全国放送番組　昭和16年12月8日」を確認すると、「当日のラジオ放送では一度も「出征兵士を送る歌」」は流れておらず、あえて、「出征兵士を送る歌」を歌ったことには重要な意味がある。「国が戦争に突進する歴史の日

に乱暴な足取りでしか歩けない主人は所詮帝国の列の足並みに同調することのできない人間」。

▼廖秀娟「戦時下の小説にみる〈歌〉の役割」（「国際日本文学研究集会会議録」四一、二〇一八・三）

太宰治全集第五巻

（担当：長原しのぶ）

「正義と微笑」

わがあしかよわく　けはしき山路／のぼりがたくとも　ふもとにありて／たのしきしらべに　たえずうたはば／ききていさみたつ　ひとこそあらめ―さんびか第百五十九（5-4）

堀田達治・福永文之助『賛美歌』（一九〇三・一一、教文館・警醒社）

●第百五十九は五節からなり、引用は二節の箇所。「組合教会、日本基督教会、浸礼教会、メソジスト教会、基督教会の五教派統一の『賛美歌』から引用」であり、「「第百五十九」は、「戦闘の教会」の「伝道」の項」に挙げられている。

▼山内祥史「解題」（『太宰治全集5』一九九〇・二、筑摩書房）

▼参照＝赤司道雄「太宰治とキリスト教」（「解釈と鑑賞」一九八七・六）

わが友の、／笑つて隠す淋しさに、／われも笑つて返す淋しさ。（5-21）

出典は不明。太宰の自作か。

自分は今、くらい、どん底を這ひまはつてゐる。けれども絶望はしてゐない。どこかわからぬところから、ぼんやり光が射して来てゐる。けれども、その光は、なんであるか自分にはわからない。光を、ぼんやり自分の掌に受けてゐながらも、その光の意味を解く事が出来ない。自分はただ、あせるばかりだ。不思議な光よ、（5-25）

出典は不明。太宰の自作か。

※登場人物（芹川進）が「長い詩を一つ作った。」と述べた後に続く「詩の大意」。直前の「武蔵野館に寄つて、「罪と罰」を見て来た。」ことが影響した「詩」と考えられる。なお、「罪と罰」については、「主人公が見ていると思われるフランス映画『罪と罰』（ピエール・シュナール監督）の本邦公開は昭和十一年十月」（島田昭男『正義と微笑』（「解釈と鑑賞」一九八七・六）。

母のあいより　なほもあつく／地のもとゐより　さらにふかし／ひとのおもひの　うへにそびえ／おほぞらよりも　ひろらかなり―さんびか第五十二（5-25）

堀田達治・福永文之助『賛美歌』（一九〇三・一一、教文館・警醒社）

●「「第五十二」は、「聖父　聖子　聖霊」のうち「聖父　摂理　慈愛」の項」に挙げられている。第五十二は四節からなり、引用は三節の箇所。

▼山内祥史「解題」（『太宰治全集5』前掲）

▼参照＝廣瀬晋也「「正義と微笑」論　信と身体」（『太宰治研究8』二〇〇〇・六、和泉書院）

※日本語の賛美歌については、「一八七二年（明治五）横浜で開かれた第一回の宣教師会で、賛美歌邦訳のことが議された際、宣教師バラの提出した二つの翻訳歌が最初のものといわれ」、各派による賛美歌集が出版されていく。そのような流れの中、「一九〇三年（明治三十六）には既刊の歌を総合統一した各派共通の『賛美歌』が出版され、これがその後、約三十年にわたり、すべての教会で使用された。」（古茂田信男・島田芳文・矢沢保・横沢千秋編『日本流行歌史〈戦前編〉』一九八一・一、社会思想社）という。

われ山にむかひて目をあぐ。わが扶助はいづこよりきたるや。（5-32）

『旧約聖書』「詩篇」第百二十一篇「京（みやこ）まうでの歌」

●「太宰治が使用した『賛美歌』では、「第四百七十六」となっていて、表記も「われ、山にむかひて、目をぞあぐる　わがたすけは、いづくよりきたるや。」となっている」ことから『旧約聖書』「詩篇」の引用を指摘。

▼山内祥史「解題」（『太宰治全集５』前掲）

※『旧約聖書』の「詩篇」は、「わがたすけは天地をつくりたまへるエホバよりきたる」と続く。「桜桃」（「世界」一九四八・五）のエピグラフにも「われ、山にむかひて、目を挙ぐ。―詩篇、第百二十一。」と登場する。

ドボルヂヤークの「新世界」（5-116）

アントニーン・ドヴォルザーク「交響曲第９番　ホ短調《新世界より》」

※芹川進の訪れた床屋のラジオから流れた曲。典拠は不明。『日本音楽史事典―トピックス 1868-2014』（二〇一四・一二、日外アソシエーツ）によれば、一九二三年六月に「海軍軍楽隊、ドボルザーク「交響曲第９番（新世界から）」を田中豊明の指揮により初演」とあり、一九二五年七月一二日に東京放送局がラジオの本放送を開始とある。

そこの爺いさん、岩の肋骨を攫まへてゐないと、／あなた、谷底へ吹き落とされてしまひますぜ。／霧が立つて夜闇の色を濃くして来た。／あの森の木のめきく云ふのをお聞きなさい。／梟奴がびつくりして飛び出しやあがる。／お聞きなさい、永遠の緑の宮殿の／柱が砕けてゐるのです。／枝がきいく云つて折れる。／幹はどうくと大きい音をさせる。／根はぎうくごうく云ふ。／上を下へとこんがらかつて、畳なり合つて、／みんな折れて倒れるのです。／そしてその屍で掩はれてゐる谷の上を／風はひゆうくと吹いて通つてゐます。／あなた、あの高い所と、／遠い所と、近い所とにする声が聞こえますか。／此山を揺り撼かして、／おそろしい魔法の歌が響いてゐますね。（5-124）

ゲーテ『ファウスト』第一部第　幕「ワルプルギスの夜」（森林太郎訳『ファウスト第一部』（一九二八・七、岩波書店）

●「メフイストフエレスの言葉」である。「『正義と微笑』（錦城出版社、昭和十七年　六月十日発行）には、「フアウスト第一部」の「ワルプルギスの夜」のMephistophelesの言葉や、「フアウスト第二部」の「第一幕風致ある土地」のFaustの言葉などが引用されている。これら引用は、「僕はポケツトから鷗外訳の『フアウスト』を取り出し」とあるから、岩波文庫版『フアウスト』からであろう」。

▼山内祥史「森鷗外と太宰治」（『森鷗外研究』第二号、一九八八・五、和泉書院）

▼参照＝山内祥史「解題」（『太宰治全集5』前掲）

※「フアウスト」は鷗座の面接試験で芹川進に手渡された「テキスト」だが、その後春秋座の試験で「あの台詞は、鷗座の試験の、とつさの場合に僕が直感で見つけたものだ。記念すべき台詞だ」とし、「ポケツトから鷗外訳の「フアウスト」を取り出し」て読み上げるとある。従って、ここでの「テキスト」も「鷗外訳の「フアウスト」」と捉えてよいだろう。

上を見ればどうだ。眼ざめたるフアウスト。／もう晴れがましい時を告げてゐる。／あの巓は、後になつて己達の方へ／向いて降りる、永遠の光を先づ浴びるのだ。／今アルピの緑に窪んだ牧場に、／新しい光や、あざやかさが贈られる。／そしてそれは一段一段と行き渡る。／日が出た。惜しい事には己はすぐ羞明しがつて／背を向ける。沁み渡る目の痛を覚えて。／（中略）此の虹が、人間の努力の影だ。／あれを見て考へたら、前よりは好くわかるだらう。／人生は、彩られた影の上にある！（5-125）

ゲーテ『フアウスト』第二部第　幕「風致ある土地」（森林太郎訳『フアウスト第二部』（一九二八・九、岩波書店）

▼参照＝山内祥史「解題」（『太宰治全集5』前掲）

※「第二部、花咲ける野の朝。眼ざめたるフアウスト」の言葉。

ダンテは、地獄の罪人たちの苦しみを、ただ、見て、とほつたさうだ。一本の縄も、投げてやらなかつたさうだ。

（5－150）

ダンテ『神曲』地獄篇

▼参照＝本誌小特集『太宰治全集第一巻』「道化の華」（担当　平浩一）

※「道化の華」（「日本浪曼派」一九三五・五）にも『神曲』からの引用があるが、その典拠は、「拠り所としてただ一つの典拠を定めることはできそうにない。鷗外訳『即興詩人』への親炙という下地の上に、上田敏訳および生田長江訳の『神曲』「地獄篇」が重なっているのを認める、ということになろうか。」（栗原敦「「道化の華」とダンテ『神曲』「地獄篇」」（『太宰治研究17』二〇〇九・六、和泉書院）という段階。

れいの、花咲ける野の場（5－154）

ゲーテ『ファウスト』第二部第　幕「風致ある土地」（森林太郎訳『ファウスト第二部』（一九二八・九岩波書店）

▼参照＝山内祥史「解題」（『太宰治全集5』前掲）

※「れいの」とは、芹川進が鷗座での面接試験で既に朗読した「第二部、花咲ける野の朝。眼ざめたるファウスト」を指す。また、ここでの「ファウスト」は「ポケットから」取り出した「鷗外訳の「ファウスト」」。

モーツアルトのフリユウト・コンチエルト（5－162）

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト「フルート協奏曲（第1番）ト長調」「フルート協奏曲（第2番）ニ長調」

※芹川進が「夜は、ひとりでレコードを聞いて過」し、「眼を細め」て聞いた曲。典拠は不明。なお、モーツアルトについては、「パンドラの匣」（「河北新報」一九四五・一〇・二〇～一九四六・一・七）に「モオツアルトの音楽みないに、軽快で、さうして気高く澄んでゐる芸術」（「花宵先生6」）とある。

チャツキリ節（5－162）

作詞・北原白秋　作曲・町田嘉章　振付・花柳徳太郎「ちゃつきり節」

●白秋の一九二七（昭和二）年一〇月の作。「唄は　ちやつきぶし、男は次郎長、／花はたちばな、／夏はたちばな、茶のかをり。／ちやつき〳〵、ちやつきりよ、／きやアるが啼くんで雨づらよ。」で始まる。「近代の茶摘みは鋏のちやつきり〳〵を以てする。ちやつきり節とはこの擬音に因んだので、あながち茶切の意ではない。静岡県近郊日本平一帯の茶摘唄として作つた。レコード番号　イーグル一七二九六、コロムビア二五六二四、ビクター五一八一八。」

▼『北原白秋地方民謡集』（一九三一・九、博文館）

▼参照＝『白秋全集30』（一九八七・六、岩波書店）

▼参照＝中島国彦「後記」（『白秋全集30』前掲）

わがゆくみちに　はなさきかをり／のどかなれとは　ねがひまつらじ―さんびか第三百十三（5－176）

堀田達治・福永文之助『賛美歌』（一九〇三・一一、教文館・警醒社）

●引用箇所の続きは「いろかめでたき　うばらさへ／とげあるものを」である。「第三百十三」は「信徒の生涯」のうちの「服従」の項」に挙げられており、「『正義と微笑』（錦城出版社、昭和一七年六月）は、巻頭に引用されている「さんびか第百五十九」と末尾の「さんびか第三百十三」とで首尾照応する。いずれも部分的に引用された二つの賛美歌の章節が示すものは、信仰の本質に変わりはないものの、それぞれ動と静、実践と受容、「伝道」と「服従」というふうにその方向、在り方としては対照的であって、作品世界は両者の交響のもとに統合されている」。

▼廣瀬晋也「「正義と微笑」論　信と身体」（『太宰治研究8』二〇〇〇・六、和泉書院）

▼参照＝山内祥史「解題」（『太宰治全集5』前掲）

「小さいアルバム」

鳴かぬ螢、沈黙の海軍（5-197）

出典は不明。太宰の自作か。「鳴かぬ螢」は、「恋に焦がれて鳴く蝉よりも、鳴かぬ蛍が身を焦がす」（『山家鳥虫歌』畿内五国　山城国風）か。

▼参照＝本誌小特集『太宰治全集第三巻』「一燈」（担当　井原あや）

※「鳴かぬ螢」は、「一燈」（「文芸世紀」一九四〇・一〇）にも「鳴かぬ螢は、何とかと言ふではないか。」と登場する。

「花火」

うたはトチチリチン、と歌つた。（5-215）

訳詞・小林愛雄　作曲・スッペ「ベアトリ姉ちゃん」（一九一五・九）

●「ベアトリ姉ちゃん　まだ寝んねかい　鼻から提灯を出して　ベアトリねえちゃん　何言ってるの　ムニャ〳〵寝言なんか言って／唄はトチチリチン　トチチリチンツン／唄はトチチリチン　トチチリチンツン／唄はトチチリチン　トチチリチンツン／こだまするまでも」。

▼古茂田信男・島田芳文・矢沢保・横沢千秋編『日本流行歌史〈戦前編〉』（一九八一・一、社会思想社）

▼参照＝野口尚志「総力戦体制下の〈家庭の幸福〉―「花火」における青年の身体」（内海紀子・小澤純・平浩一編『太宰治と戦争』二〇一九・五、ひつじ書房）

昔コヒシイ銀座の柳イ、と呶鳴るやうにして歌つた。（5-227）

作詞・西条八十　作曲・中山晋平　歌手・佐藤千夜子「東京行進曲」（一九二九・五）

●四番まであり、一番の歌詞が「昔恋しい　銀座の柳　仇な年増を　誰が知ろ　ジャズで踊って　リキュールで更けて　明けりゃダンサーの　涙雨」。「昭和四年五月ビクターより出たが、小田急も開通した許り、当時のモダン風景を叙した名作として全国を風靡。すぐご華やかに迎えられた大ヒット曲」。

▼古茂田信男・島田芳文・矢沢保・横沢千秋編『日本流行歌史〈戦前編〉』（前掲）

▼参照＝野口尚志「総力戦体制下の〈家庭の幸福〉―「花火」における青年の身体」（前掲）

トトサン、御無事デ、エエ、マタア、カカサンモ。（5-228）

作詞・後藤紫雲／添田啞蟬坊「新どんどん節」（一九一一・五）

●五番まであり、一番の歌詞が「駕籠で行くのはお軽じゃないか　わたしゃ売られて行くわいな　父さん御無事で又かかさんも　お前も御無事で折々は　たより聞いたり　聞かせたり　ドンドン」。

▼古茂田信男・島田芳文・矢沢保・横沢千秋編『日本流行歌史〈戦前編〉』（前掲）

▼参照＝野口尚志「総力戦体制下の〈家庭の幸福〉―「花火」における青年の身体」（前掲）

「鉄面皮」

伊豆の海の白く立ち立つ浪がしら。／鹽の花ちる。／うごくすすき。／蜜柑畑。（5-301）

※出典は不明。太宰の自作か。

▼参照＝赤木孝之「「鉄面皮」論」（『太宰治研究８』二〇〇〇・六、和泉書院）

※「HUMAN LOST」（「新潮」一九三七・四）からの引用。「日記形式の小説の十一月一日のところに左のやうな文章がある」とし、「実朝をわすれず。」の一行から続く。「鉄面皮」には「右大臣実朝」（錦城出版社　一九四

三・九）からの本文引用が多く確認できるが、『太宰治全集第六巻』（筑摩書房　一九七六・五）では、「本篇に引用されている「右大臣実朝」の文章と、本巻所収の「右大臣実朝」本文（初版本に拠る）との間に若干の異同がみられるが、本篇の引用文は謂わば「右大臣実朝」の第一稿ともいうべきもので、これに加筆訂正したものが「右大臣実朝」の決定稿」（関井光男「解題」）とある。

老イヌレバ年ノ暮ユクタビゴトニ我身ヒトツト思ホユル哉（5－307）

源実朝『金塊和歌集』

※「右大臣実朝」（錦城出版社　一九四三・九）からの引用。「あまり抜書きすると、出版元から叱られるかも知れない」とし、「他の雑誌に分載されるのだつたら、こんな抜書きは許すべからざる犯罪にきまつてゐるが、三百枚いちどに単行本として出版するんだから、まあ、五、六枚のところは、笑許、なんて言葉はない、御寛恕を乞ふ次第だ」と説明。

「右大臣実朝」

老イヌレバ年ノ暮ユクタビゴトニ我身ヒトツト思ホユル哉（5－319）

源実朝『金塊和歌集』

●「右大臣実朝」の『金塊和歌集』からの引用については、『鶴岡』臨時増刊（生誕七百五十年記念源実朝号、一九四二・八）が指摘（津島美知子「「右大臣実朝」と「鶴岡」」（『回想の太宰治』一九七八・五、人文書院））されているが、「鶴岡」以外からを定家所伝本系統の「定家所伝本」と「群書類従本」とし、「類従本を定本とした印刷物からか、類従本との異同を記載する定家所伝本を定本とした印刷物からか」とする。

▼山内祥史「太宰治と日本古典文学―原拠の紹介を中心に―」（「解釈と鑑賞」一九八七・六）

▼参照＝山内祥史「解題」（『太宰治全集５』一九九〇・二、筑摩書房）

※語り手（近習）によれば、実朝が「十七歳になられたばかりの頃」につくった歌。「老人憐年暮」という題の歌であり、定家所伝書では「雑」に分類されている。

「新中納言知盛卿、小船に乗つて、急ぎ御所の御船へ参らせ給ひて『世の中は今はかくと覚え候ふ。見苦しき者どもをば皆海へ入れて、船の掃除召され候へ』とて、掃いたり、拭うたり、塵拾ひ、艫舳に走り廻つて手づから掃除し給ひけり。女房達『やや中納言殿、軍のさまは如何にや、如何に』と問ひ給へば『只今珍らしき吾妻男をこそ、御覧ぜられ候はんずらめ』とて、からからと笑はれければ」（5-326）

『平家物語』巻第十一「先帝身投」

▼参照＝山内祥史「解題」（『太宰治全集5』前掲）

※実朝が「琵琶法師をお召しに」なって「平家琵琶」で聞いた「壇浦合戦」の一場面。

「与一鏑を取つて番ひ、能つ引いてひやうと放つ。小兵といふ條、十二束三伏、弓はつよし、鏑は浦響くほどに長鳴して、過たず扇の要ぎは一寸ばかり置いて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海に入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一もみ二もみ揉まれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の夕日に輝く、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられけるを、沖には平家舷を叩きて感じたり。陸には源氏箙をたたいてどよめきけり」（5-327）

『平家物語』巻第十一「那須与一」

▼参照＝山内祥史「解題」（『太宰治全集5』前掲）

※実朝が聞いた「平家琵琶」の「那須与一の段」。近習によれば、「壇浦合戦など最もお気に入りの御様子」に比べ、「源氏の活躍」は「あまりお求めにならないやう」だったことを示す段。

「あまりの面白さに、感に堪へずや思はれけん、平家のかの船の中より齢五十ばかりなる男の、黒革威の鎧著たるが、白柄の長刀杖につき、扇立たる所に立つて舞ひすましたり。伊勢三郎義盛、与一が後に歩ませ寄つて『御諚にてあるぞ。これをも亦仕れ』といひければ、与一今度は中差取つて番ひ、能つ引いてひやうと放つ。舞ひすましたる男の、真只中をひやうと射て、舟底へ真逆様に射倒す。ああ射たりといふ者もあり、いやいや情なしといふ者も多かりけり。平家の方には、静まり返つて音もせず。源氏は又箙を叩いてどよめきけり」（5-327）

『平家物語』巻第十一「弓流」

▼参照＝山内祥史「解題」（『太宰治全集5』前掲）

※近習によれば、実朝は「法師の節をおもしろく語るのを皆まで聞かず、ついとお座をお立ちになつてしまひました」とある。

ハルサメノ露ノヤドリヲ吹ク風ニコボレテ匂フヤマブキノ花（5-328）

源実朝『金塊和歌集』

▼参照＝山内祥史「太宰治と日本古典文学―原拠の紹介を中心に―」（「解釈と鑑賞」一九八七・六）

▼参照＝山内祥史「解題」（『太宰治全集5』前掲）

※「雨のふれる日、山吹をよめる」歌。定家所伝書では「春」に分類される。

時ニヨリ過グレバ民ノ歎キナリ八大龍王雨止メ給ヘ（5-347）（5-426）

源実朝『金塊和歌集』（「実朝座談会記事」、『鶴岡』臨時増刊、前掲）

●「『右大臣実朝』には、『金塊和歌集』（『鎌倉右大臣家集』）の歌が十八首掲げられている。このうち、「鶴岡」にも掲げられている歌は十一首だ。「山ハサケ」の歌が六回、「タマクシゲ」「箱根路ヲ」の歌が各五回、

「時ニヨリ」「大海ノ」「焔ノミ」の歌が各四回、「オホキミノ」の歌が三回、「ヒンガシノ」の歌が二回、「我宿ノ」「歎キワビ」「カクテノミ」の歌が各一回掲げられている」。

▼山内祥史「解題」（『太宰治全集５』前掲）

▼参照＝山内祥史「太宰治と日本古典文学―原拠の紹介を中心に―」（前掲）

▼参照＝津島美知子「「右大臣実朝」と「鶴岡」」（『回想の太宰治』前掲）

※「建暦元年七月洪水天に漫り、土民愁歎せむことを思ひて、一人本尊に向ひ奉り、聊か祈念を致して云ふ」歌であり、近習によって二回引用される。一回目は「名実ともに関東の大長者たる堂々の御貫禄」を象徴する歌として挙げられ、二回目も「押しも押されもせぬ古今独歩の大歌人たる御品格」を表す歌として登場。

草モ木モ靡シ秋ノ霜消テ空キ苔ヲ払フ山嵐（5-351）（5-357）

『吾妻鏡』巻十九（龍粛訳注『岩波文庫　吾妻鏡（四）』一九四一・一一、岩波書店）

●龍粛訳注『吾妻鏡』第一巻（岩波書店　一九三九・八）から第四巻（岩波書店　一九四一・一一）までが主たる典拠（津島美知子「「右大臣実朝」と「鶴岡」」（『回想の太宰治』人文書院　一九七八・五）とされる。また、関井光男「解題」（『太宰治全集第六巻』筑摩書房　一九七六・五）に、「本巻一七七頁一三行目には「（以上吾妻鏡）」とあるのみだが、第一稿においては「（以上龍粛氏訳吾妻鏡）」とあったことから、作者が同書に拠ったことが知れる」とある。その詳細を山内祥史は、「「鉄面皮」に「吾妻鏡の本文を少し抜粋しては作品の要所々々に挿入して置いた」という、『右大臣実朝』における本文の抜萃は、「吾妻鏡巻第十九」の「承元二年戊辰」の「二月小」から、「吾妻鏡巻廿四」の「健保七年己卯」の「正月大」の「廿七日、申午」までで、『吾妻鏡』⑷岩波文庫205）』の七頁から一七二頁まで、実朝十七歳から二十八歳までの記述」であるが、「日本古典全集本の『吾妻鏡四』（日本古典全集刊行会、大正十五年六月二十日発行）『吾妻鏡五』（同前、昭和二年十一月二十五日発行）なども参照しながら、本文を抜萃し挿入していったのではないか」とする。

▼山内祥史「解題」（『太宰治全集５』前掲）

▼参照＝龍粛訳注『岩波文庫　吾妻鏡（四）』（前掲）

▼参照＝嘉数弓子「歴史小説「右大臣実朝」考　執筆参考資料をめぐって」（「太宰治　第七号」一九九一・六）

▼参照＝安藤宏「コラム36「右大臣実朝」―原稿を中心に」（『太宰治論』二〇二一・一二、東京大学出版会）

※鴨長明が「故右大将家の御忌日に法華堂へお参り」した時、涙を流しながら「御堂の柱」に記した歌。抜粋された『吾妻鏡』（龍粛訳注）と近習の語りの二箇所に登場する。『吾妻鏡』（龍粛訳注）では「草モ木モ靡シ秋ノ霜消テ空キ苔ヲ払フ山嵐」と表記され、引用のままである。近習の語りでは「草モ木モ靡キシ秋ノ霜消エテ空キ苔ヲ払フ山嵐」と表記される。神谷忠孝は『右大臣実朝』（「解釈と鑑賞」一九九六・六）で、鴨長明に対する近習の語りは「蓮田善明の「鴨長明」を参考にしたと思われる」とし、蓮田善明「鴨長明」（「文芸文化」一九四一・四～一二→『蓮田善明全集』一九八九・四、島津書房）を挙げている。

ユヒソメテ馴レシタブサノ濃紫オモハズ今ニアサカリキトハ（5-356）

源実朝『金塊和歌集』

▼参照＝山内祥史「太宰治と日本古典文学―原拠の紹介を中心に―」（前掲）

▼参照＝山内祥史「解題」（前掲）

※定家所伝書では「雑」に分類される。「しのびていひわたる人ありき、はるかなるかたへゆかむといひ侍りしかば」の詞書に続く「去って行く女性に対する惜別の情」（『新編日本古典文学全集49　中世和歌集』二〇〇〇・一一、小学館）を表現した歌。鴨長明が、「真似事でございます。たとへば、恋のお歌など。将軍家には、恐れながら未だ、真の恋のこころがおわかりなさらぬ。都の真似をなさらぬやう」と実朝を批判する際に挙げた歌。

アラ磯ニ浪ノヨルヲ見テヨメル／大海ノ磯モトドロニヨスル浪ワレテクダケテサケテ散ルカモ（5-364）

源実朝『金塊和歌集』（「金塊和歌集鈔」・米川稔「金塊和歌選釈」、『鶴岡』臨時増刊、前掲）

▼参照＝山内祥史「太宰治と日本古典文学―原拠の紹介を中心に―」（前掲）
▼参照＝山内祥史「解題」（『太宰治全集５』前掲）
▼参照＝津島美知子「「右大臣実朝」と「鶴岡」」（『回想の太宰治』前掲）
※「荒磯に波のよるを見てよめる」歌。近習が「ほとんど人間業ではなく、あまりの見事に」と感じるように、実朝の「代表作の一つ」（『新編日本古典文学全集49　中世和歌集』前掲）とされる。定家所伝書では「雑」に分類される。

忍ビテイヒワタル人アリキ（5-367）

源実朝『金塊和歌集』
※「はるかなるかたへゆかむといひ侍りしかば」と続く。鴨長明が「恋のお歌だけは、あまり御上手でない」と、実朝を批判する場面で挙げた「ユヒソメテ馴レシタブサノ濃紫オモハズ今ニアサカリキトハ」（5-356）の歌の詞書の一部。

春雨ニウチソボチツツアシビキノヤマ路ユクラム山人ヤ誰（5-377）

源実朝『金塊和歌集』
▼参照＝山内祥史「太宰治と日本古典文学―原拠の紹介を中心に―」（前掲）
▼参照＝山内祥史「解題」（『太宰治全集５』前掲）
※近習が「滅多に遠く御他出などなさらなかつた将軍家にとつては、これが唯一のお気晴しの御遊山であったかも知れない」と述べる「二所詣」（「箱根権現」と「伊豆山権現」）の途中での歌。定家所伝書では「旅」に分類される。

タマクシゲ箱根ノ水海ケケレアレヤニクニカケテ中ニタユタフ（5－378）

源実朝『金塊和歌集』（「実朝座談会記事」、『鶴岡』臨時増刊、前掲）

▼参照＝山内祥史「太宰治と日本古典文学―原拠の紹介を中心に―」（前掲）

▼参照＝山内祥史「解題」（『太宰治全集5』前掲）

※「又のとし二所へまゐりし時、箱根のみうみを見てよみ侍る歌」。「春雨ニウチソボチツツアシビキノヤマ路ユクラム山人ヤ誰」と同じく、「二所詣」の際の歌。実朝の「代表作の一つ」（『新編日本古典文学全集49　中世和歌集』前掲）。定家所伝書では「雑」に分類される。

箱根ノ山ヲウチ出デテ見レバ小島アリ供ノ者ニ此ウミノ名ヲ知ルヤト尋ネシカバ伊豆ノ海トナン申スト答ヘ侍リシヲ聞キテ／箱根路ヲ我コエクレバ伊豆ノ海ヤ沖ノ小島ニ浪ノヨル見ユ（5－379）

源実朝『金塊和歌集』（「金塊和歌集鈔」、『鶴岡』臨時増刊、前掲）

▼参照＝山内祥史「太宰治と日本古典文学―原拠の紹介を中心に―」（前掲）

▼参照＝山内祥史「解題」（前掲）

▼参照＝津島美知子「「右大臣実朝」と「鶴岡」」（『回想の太宰治』前掲）

※「箱根ノ山ヲウチ出デテ見レバ小島アリ供ノ者ニ此ウミノ名ヲ知ルヤト尋ネシカバ伊豆ノ海トナン申スト答ヘ侍リシヲ聞キテ」を詞書とする歌。定家所伝書では「雑」に分類され、「二所詣」の途中で詠んだ箱根の光景。近習が「まことに神品」「名歌」と述べるように実朝の「代表作の一つ」（『新編日本古典文学全集49　中世和歌集』二〇〇〇・一一、小学館）。

太上天皇御書下預時歌／オホキミノ勅ヲカシコミ千々ワクニ心ハワクトモ人ニイハメヤモ／ヒンガシノ國ニワガヲレバ朝日サスハコヤマノ山ノカゲトナリニキ／山ハサケ海ハアセナム世ナリトモ君ニフタ心ワガアラメヤモ（5-380）

源実朝『金塊和歌集』（米川稔「金塊和歌選釈」、『鶴岡』臨時増刊、前掲）

▼参照＝山内祥史「太宰治と日本古典文学―原拠の紹介を中心に―」（前掲）

▼参照＝山内祥史「解題」（『太宰治全集5』前掲）

▼参照＝津島美知子「「右大臣実朝」と「鶴岡」」（『回想の太宰治』前掲）

※三首は、後鳥羽上皇の「御書」に対する歌。実朝の中にある「上皇への忠誠心と将軍としての立場の矛盾に悩む心」、「朝幕の軋轢の中にある苦渋の心」と注釈（『新編日本古典文学全集49　中世和歌集』前掲）されるが、近習は、「御新書を賜」った実朝が「百雷一時に落ちる以上の強い衝動を覚えられ、その素直なる御返答」をよんだ歌と解釈。定家所伝書では三首とも「雑」に分類される。

我宿ノマセノハタテニハフ瓜ノナリモナラズモ二人ネマホシ（5-403）

源実朝『金塊和歌集』（「金塊和歌集鈔」、『鶴岡』臨時増刊、前掲）

▼参照＝山内祥史「太宰治と日本古典文学―原拠の紹介を中心に―」（前掲）

▼参照＝山内祥史「解題」（『太宰治全集5』前掲）

▼参照＝津島美知子「「右大臣実朝」と「鶴岡」」（『回想の太宰治』前掲）

※「将来は分らぬが、ともかく一度共寝をしてみたいという激しい恋の歌」（『新日本古典集成　金塊和歌集』新潮社　一九八一・六）だが、近習の語りでは、酒に酔った実朝が女房達に対する「お気軽な御冗談」として詠んだ歌。定家所伝書では「雑」に分類される。

浮キシズミハテ泡トゾ成リヌベキ瀬々ノ岩波身ヲクダキツツ（5-407）

源実朝『金塊和歌集』

▼参照＝山内祥史「太宰治と日本古典文学―原拠の紹介を中心に―」（前掲）

▼参照＝山内祥史「解題」（『太宰治全集5』前掲）

※「恋に悩み、焦がれ死にしそうな自分を、川瀬の波が岩に砕け散るさまに喩えた」（『新潮日本古典集成　金塊和歌集』前掲）とされる歌だが、近習の語りでは「わけもない御酒宴」において、「いたづら書きのやうに懐紙に無雑作に」書いた歌。定家所伝書では「恋」に分類される。

行キメグリ又モ来テ見ンフルサトノ宿モル月ハ我ヲワスルナ（5-408）

源実朝『金塊和歌集』

▼参照＝山内祥史「太宰治と日本古典文学―原拠の紹介を中心に―」（前掲）

▼参照＝山内祥史「解題」（『太宰治全集5』前掲）

※近習が「折からの名月に対して和歌の御会をおひらきになり」と述べるように、「故郷月」と題した歌。なお、近習の語る「十五日には、折からの名月に対して和歌の御会をおひらきになり」という建暦三年（建保元年）四月十五日の記述は引用する『吾妻鏡』では省略されているが、龍粛訳注『岩波文庫　吾妻鏡（四）』（前掲）では、「十五日、丙戌、（中略）時に将軍家、朗月に対し、南面に於て和歌御会有り、女房数輩其砌に候す、朝盛参進し、秀逸を献ずるの間、御感再往に及ぶ」とある。定家所伝書では「雑」に分類される。

歎キワビ世ヲソムクベキ方知ラズ吉野ノ奥モ住ミウシト云ヘリ（5-408）

源実朝『金塊和歌集』（「金塊和歌集鈔」、『鶴岡』臨時増刊、前掲）

▼参照＝山内祥史「太宰治と日本古典文学―原拠の紹介を中心に―」（前掲）
▼参照＝山内祥史「解題」（『太宰治全集５』前掲）
▼参照＝津島美知子「「右大臣実朝」と「鶴岡」」（『回想の太宰治』前掲）
※「末句の突き放したような散文調は、隠遁したくてもできない身の諦観とも見られよう」（『新編日本古典文学全集49　中世和歌集』前掲）との解釈もあるが、近習は「ただ静かにお笑ひになつて」和歌を詠む実朝を「何もかも前から御見透しだつたやうな落ちついた御態度」であり、「将軍家おひとりは、平然たるもの」と評する。定家所伝書では「雑」に分類される。

焔ノミ虚空ニミテル阿鼻地獄ユクヘモナシトイフモハカナシ（5-415）

源実朝『金塊和歌集』（米川稔「金塊和歌選釈」（『鶴岡』臨時増刊、前掲）
▼参照＝山内祥史「太宰治と日本古典文学―原拠の紹介を中心に―」（前掲）
▼参照＝山内祥史「解題」（『太宰治全集５』前掲）
▼参照＝津島美知子「「右大臣実朝」と「鶴岡」」（『回想の太宰治』前掲）
※「思罪業歌」と題した歌。近習は、「カクテノミ有リテハカナキ世ノ中ヲウシトヤイハン哀トヤ云ハン」（5-415）と「神トイヒ佛トイフモヨノナカノ人ノ心ノホカノモノカハ」（5-415）の三首を並べ、「鎌倉天地震怒の和田合戦」の顛末に関する実朝の心情として語る。定家所伝書では「雑」に分類される。

カクテノミ有リテハカナキ世ノ中ヲウシトヤイハン哀トヤ云ハン（5-415）

源実朝『金塊和歌集』（「実朝座談会記事」、『鶴岡』臨時増刊、前掲）
▼参照＝山内祥史「太宰治と日本古典文学―原拠の紹介を中心に―」（前掲）

▼参照＝山内祥史「解題」（『太宰治全集５』前掲）
▼参照＝津島美知子「「右大臣実朝」と「鶴岡」」（『回想の太宰治』前掲）
※「無常」を詠んだ歌。定家所伝書では「雑」に分類される。

神トイヒ佛トイフモヨノナカノ人ノ心ノホカノモノカハ（5-415）

源実朝『金塊和歌集』
▼参照＝山内祥史「太宰治と日本古典文学―原拠の紹介を中心に―」（前掲）
▼参照＝山内祥史「解題」（『太宰治全集５』前掲）
※「心の心をよめる」歌。定家所伝書では「雑」に分類される。

松風は水の音に似てゐるとか何とか（5-424）

※出典は不明。太宰の自作か。
※『吾妻鏡』巻廿一（龍粛訳注『岩波文庫　吾妻鏡（四）』前掲）では、引用の通り、建暦三年（癸酉十二月六日建保元年と為す）七月七日に「今日御所に於て和歌御会有り」とだけ記されている。近習が、「～とか何とかいふ」「ほんの間に合せ程度の和歌」と語ることをからも相州（北条義時）の詠んだ具体的な歌は不明。

松風は水の音にしても、また鶉が鳴いて月が傾いたとかいふ歌（5-425）

※出典は不明。太宰の自作か。

※相州（北条義時）が二つ三つ作った「間に合せ程度の和歌」。「松風は水の音にしても」は直前の「松風は水の音に似てゐるとか何とか」（5-424）を指す。「鶉が鳴いて月が傾いた」の歌と合わせて「～とか何とか」「とかいふ歌」という近習の曖昧な記憶が強調されることで「どなたも感服なさいません」という歌の程度を示す。具体的な歌は不明。

出テイナバ主ナキ宿ト成ヌトモ軒端ノ梅ヨ春ヲワスルナ（5-472）

『吾妻鏡』巻廿四（龍粛訳注『岩波文庫　吾妻鏡（四）』（前掲）

●『吾妻鏡』（龍粛訳注）の表記は「出テイナハ主ナキ宿ト成ヌトモ軒端ノ梅ヨ春ヲワスルナ」であり、一字（「バ」）を除いて引用のまま。

▼龍粛訳注『岩波文庫　吾妻鏡（四）』（前掲）

※「（以上吾妻鏡）」として引用の形で提示される「庭の梅を見て禁忌の和歌を詠じ給ふ」という実朝の辞世の歌。

太宰治全集第六巻

（担当：吉岡真緒）

「赤心」

山ハサケ海ハアセナム世ナリトモ君ニフタ心ワガアラメヤモ（6-3）

源実朝『金槐和歌集』（雑六五三）

※「赤心」は、執筆中だった「右大臣実朝」の一部を、一頁に収まるように構成した辻小説。

「右大臣実朝」では「太上天皇御書下預時歌」（5-380）の一首。

●「歴然とした照応関係から、『右大臣実朝』に所掲のうち十一首は、「鶴岡」源実朝号から引用したと、考えることも可能だ」

▼山内祥史「解題」（『太宰治全集５』一九九〇・二、筑摩書房）

▼参照＝「鶴岡」臨時増刊、生誕七百五十年記念源実朝号（一九四二・八）

●「『右大臣実朝』に太宰は実朝の和歌を片仮名で入れているが、平仮名を片仮名に変えただけでなく、あるいは漢字を片仮名に、平仮名を漢字に直して、諸伝本のどれにもない自己流の表記をしている」

▼津島美知子「右大臣実朝」と「鶴岡」（『増補改訂版　回想の太宰治』一九九七・八、人文書院）

「花吹雪」

サヨナラだけが人生だ（6-19）

コノサカヅキヲ受ケテクレ／ドウゾナミナミツガシテオクレ／ハナニアラシノタトヘモアルゾ／「サヨナラ」ダケガ人生ダ（于武陵作、井伏鱒二訳「勧酒」）

井伏鱒二「中島健蔵に」（「作品」一九三五・三）

残燈滅して又明らの希望（6-27）

早蛩（さうきよう）啼きて復（また）歇（やす）み、残燈（ざんとう）滅して又明（またあきら）かなり。／牕（まど）を隔（へだ）てて夜雨（やう）を知る。芭蕉（ばせうま）先づ聲（こえ）あり。（白居易「夜雨」）

▼参照＝簡野道明『白詩新釈』（一九三三・八、明治書院）

「作家の手帖」

ワタシノ母サン、ヤサシイ母サン。／ワタシノ母サン、ヤサシイ母サン。（6-61）

※太宰の自作唱歌か。唱歌「オウマ」二番冒頭に似ているか。

オウマノ　カアサン、　ヤサシイ　カアサン。／コウマヲ　見ナガラ、ポックリ　ポックリ　アルク。

唱歌、林柳波作詞、松島彝（つね）作曲「オウマ」

▼参照＝『ウタノホン上』（一九四一・三、文部省）

「不審庵」

寒暑栄枯天地之呼吸也。苦楽寵辱人生之呼吸也。達者ニ在ツテハ何ゾ必ズシモ其処遽カニ至ルヲ驚カン哉。（6－71）

寒暑栄枯天地之呼吸也苦楽寵／辱人生之呼吸也在達者何必驚其遽至哉（津島家蔵、佐藤一斎書幅）

●「佐藤一斎の書幅も、勿論好んで掛けていたわけではない。（中略）母がくれたので、元来亡父の遺品である。純粋の明治人である父にとって、一斎は敬慕の的だったのだろう。茶渋色の唐紙に「寒暑栄枯天地之呼吸也苦楽寵」「辱人生之呼吸也在達者何必驚其遽至哉」と二行、急湍のような筆勢で書きくだし、「一斎老人」と、「愛日」「八十翁」という落款が入っている」

▼津島美知子『増補改訂版　回想の太宰治』（前掲）

▼参照＝『新潮日本文学アルバム19　太宰治』（一九八三・九、新潮社）

※佐藤一斎「言志耋録」に書幅の言説と似た一節「寒暑栄枯、天地之呼吸也。苦楽栄辱、人生之呼吸也。即世界之所以為活物」がある。

▼参照＝佐藤一斎『言志四録　新註』（一九三六・六、明治書院）

「散華」

御元気ですか。／遠い空から御伺ひします。／無事、任地に着きました。／大いなる文学のために、／死んで下さい。／自分も死にます、／この戦争のために。（6－86、89、92）

三田循司書翰太宰治宛（未確認）

※『散華』において「私（太宰）」宛て四通の「三田君（三田循司）」の書翰はいずれも「お便り」として引用されているが、三度引用される四通目の右のみ「実に最高の詩のやうな気さへして来た」と「詩」の位置づけがなされている。

作中「戸石君」のモデル・戸石泰一の「玉砕」に三田の書翰が引用されている。森田實蔵は「玉砕」引用が原文と推定している。

●「先生／死ンデ下サイ／文学ノタメニ／私モ／死ニマス／大イナル戦争ノタメニ」

▼戸石泰一「玉砕」（「小説朝日」一九五二・九）

▼参照＝森田實蔵「太宰さんの思い出」（『太宰治研究3』一九九六・七、和泉書院）

「津軽」

津軽の雪／こな雪／つぶ雪／わた雪／みづ雪／かた雪／ざらめ雪／こほり雪（東奥年鑑より）（6-138）

『東奥年鑑』東奥日報社

※山内祥史は一九三八年七月発行「昭和十三年版」「気象」の「雪の種別決定」、宮崎靖士は一九四一年七月発行「昭和一六年版」「気象」の「気象の常識」中「雪の種類」を典拠と推断。

「昭和十三年版」には順に「粉雪」「綿雪」「水雪」「粗目雪」「凍雪」の順に記載があり、漢字表記も含め「つぶ雪」「かた雪」の記載は無い。

「昭和十六年版」の「雪の種類」は、宮崎が指摘する通り「『ゆき』という平仮名表記が、『雪』という漢字表記に改められている以外には、各名称及び記述の順序がそのまま対応」している。

▼参照＝山内祥史「解題」（『太宰治全集6』一九九〇・四、筑摩書房）

参照＝宮崎靖士「引用の織物としての『津軽』――『津軽の雪』と『津軽凶作年表』の典拠問題を中心に――」（「弘前大学国語国文学」一九九七・三）

●「十六年版『東奥年鑑』における『雪の種類』の一節はあくまでも、『気象の常識』という項目において『風の種類』『地震の種類』と並置された、一般的な雪の種類、全国共通の雪の分類基準として記されているものである。にもかかわらず、『津軽』においてはそれが『津軽の雪』と地域的に限定、かつ命名されてしまっている」「『津軽の雪』は、地元紙の年鑑に収録される程地域に密着した、津軽の風土から生み出された詩であるかのように記されていたことを想起したい」

▼宮崎靖士「引用の織物としての『津軽』」（前掲）

何れの処か酒を忘れ難き。天涯旧情を話す。／青雲倶に達せず、白髪逓（たがひ）に相驚く。／二十年前に別れ、三千里外に行く。／此時一盞（さん）無くんば、何を以てか平生を叙せん。（白居易）（6-171、173）

白居易「何処難忘酒七首」

▼参照＝簡野道明『白詩新釈』（一九三三・八、明治書院）

いくう、山河あ、と、れいの牧水の旅の歌を（6-231）

幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく

若山牧水『海の聲』（一九〇八・七、生命社）

とうかいのう、小島のう、磯のう、と、啄木の歌をはじめたのだが（6-231）

東海の小島の磯の白砂に／われ泣きぬれて／蟹とたはむる（石川啄木『一握の砂』「我を愛する歌」一九一〇・一二、東雲堂書店）

今もまた昔を書けば増鏡（6－232）

今もまた昔をかけばます鏡ふりぬる代代のあとにかさねむ（「増鏡」作者）

『増鏡』

せッせッせ／夏もちかづく／八十八夜／野にも山にも／新緑の／風に藤波／さわぐ時（6－232）

※唱歌「茶摘」と「花ごよみ」とを組合せたか。

「せッせッせ」は手遊びを意識したものか。

夏も近づく八十八夜、／野にも山にも若葉が茂る。／「あれに見えるは茶摘じゃないか。あかねだすきに菅の笠。

唱歌「茶摘」

▼参照＝『尋常小学唱歌　第三学年』（一九一二・三、文部省）

野べも山べも新緑の／風に藤波さはぐ時、／池水にほふかきつばた。

唱歌「花ごよみ」

▼参照＝『大正新選学校唱歌集』（一九一四・一、春江堂）

古池や蛙飛び込む水の音（6－251）

松尾芭蕉の発句（仙化編『蛙合』）

山吹や蛙飛び込む水の音（6－251）

※「其角、ものかは。なんにも知らない」と続く。

芭蕉「古池や蛙飛び込む水の音」の上五が決定するに際して「晋子（其角）」が「山吹といふ五文字を冠むらしめむかとおよづけ侍る」という一節を踏まえての句。

▼参照＝野盤子支考述、潜淵庵不玉撰「葛の松原」（佐々醒雪、巌谷小波編『俳論作法集』一九一四・六、博文館）

われと来て遊べや親の無い雀（6－251）

我と来て遊べや親のない雀（小林一茶『おらが春』）

われは海の子白浪の騒ぐ磯辺の松原に（6－262）

我は海の子白浪の／さわぐいそべの松原に、／煙たなびくとまやこそ／我がなつかしき住家なれ

唱歌「われは海の子」

▼参照＝『文部省選定　学校新唱歌』「尋常小学校読本唱歌集」（一九一二・一、由盛閣）

「貧の意地」

貧病の薬いただく雪あかり（6－308）

ひんびやうの妙薬金用丸よろづによし

「西鶴諸国はなし」巻一の三「大晦日はあはぬ算用　義理　江戸の品川にありし事」

▼参照＝『底本西鶴全集３』（一九五五・九、中央公論社）

※太宰の自作句か。

「吉野山」

花と見るまで雪ぞ降りけるだの（6-399）

ふゆこもり思ひかけぬを木の間より花と見るまで雪ぞ降りける（紀貫之『古今和歌集』巻六冬三三一）。

※西鶴「万の文反古」巻五「桜よし野山難儀の冬」には、坂上是則「あさぼらけ有明けの月と見るまでに吉野の里に降れる白雪」（坂上是則『古今和歌集』巻六冬三三二）を引いた「ふれるしら雪と読し本哥の詠めも、いかな〳〵目につかず」との一節がある。

▼参照＝『底本西鶴全集８』（一九五〇・三、中央公論社）

春に知られぬ花ぞ咲きけるだの（6-399）

雪ふれは冬こもりせる草も木も春に知られぬ花ぞ咲きける（紀貫之『古今和歌集』巻六冬三二三）

おしなべて花の盛りになりにけり山の端毎にかかる白雲（6-403）

西行『千載和歌集』巻一春上六九

吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ（6-403）

西行『新古今和歌集』巻一七雑中一六一七

吉野山やがて出でんと思ふ身を花散る頃はお迎へたのむ（6－403）

吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ（西行『新古今和歌集』巻一七雑中一六一七）

※太宰の自作歌か

歎きわび世をそむくべき方しらず、吉野の奥も住み憂しと言へり（6－406）

歎きわび世をそむくべき方しらず吉野の奥も住みうしといへり（源実朝『金槐和歌集』雑五九一）

▼参照＝「鶴岡」（前掲）

太宰治全集第七巻

（担当：滝口明祥）

「惜別」

瞬く間には、山をおほひ、

うち見るひまにも、海を渡る、

雲てふものこそ、奇すしくありけれ、

雲よ、雲よ、

雨とも霧とも、見るまに変りて、

あやしく奇しきは、

雲よ、雲よ、（7－17）

「雲」

▼参照＝『小学唱歌集　第三編』（一八八四・六、文部省）

富士の根ににほふ朝日も霞むまで
としたつ空ののどかなるかな（7－79）

明治天皇が一九〇五年に詠んだ和歌

▼参照＝『明治天皇御製集』（一九一二・八、趣味社）

仰げば尊し　わが師の恩
教への庭にも　はやいくとせ
思へば　いととし　この年月
今こそわかれめ　いざさらば
互ひにむつみし　日頃の恩
わかるるのちにも　やよ忘るな（7－120）

「あふげば尊し」

▼参照＝『小学唱歌集　第三編』（前掲）

「竹青」

馬嘶て白日暮れ、劍鳴て秋気来る（7－132）

呂温「鞏路感懐」の一節。

▼参照＝鈴木二三雄「太宰治と中国文学（二）」（「立正大学国語国文」一九七〇・三）→『日本文学研究資料叢書　太宰治Ⅱ』一九八五・九、有精堂）

※全文は以下の通り。「馬嘶白日暮／劍鳴秋気来／我心渺無際／河上空徘徊」。『唐詩選』にも収録されている。

秋風翻す黄金浪花千片（7－134）

※白居易「江樓眺晩景物鮮奇吟翫成篇寄水部張員外」（江楼にて晩に景物の鮮奇なるを眺め吟翫して篇を成し水部張員外に寄す）の一節「風翻白浪花千片」が元になっているか。その一節は『和漢朗詠集』に収録されている。

▼参照＝劉金宝『太宰治と中国――作品における中国的モチーフについての考察』（二〇一六・四、花書院）

秋風嫋々と翼を撫で、（7－135）

●「屈原の辞賦「湘夫人」と題した「帝子降兮北渚。目眇眇兮愁予。嫋嫋兮秋風。洞庭波兮木葉下。…」の引用と思われる。」

▼鈴木二三雄「太宰治と中国文学（二）」（前掲）

※なお、鈴木は「玉鏡に可憐一点の翠黛を描いて湘君の俤をしのばしめ」も「湘夫人」が元になっていると見ているが、大野正博「聊斎志異『竹青』について――太宰治『竹青』との比較」（「集刊東洋学」一九七三・六）は、『世界地理風俗大系』第三巻（一九三〇・七、新光社）の記述が元になっていることを明らかにしている。

屈原も衆人皆酔ひ、我独醒めたり、と叫んで、（7－139）

●「あまり多くの人には知られていない屈原の辞賦の一つである「漁夫」の中の一節、「屈原曰。挙世皆濁。我独清。衆人皆酔。我独醒。」まで引用している太宰の博識を思わせられる。」

▼鈴木二三雄「太宰治と中国文学（二）」（前掲）

人間到るところに青山があるとか書生さんたちがよく歌ってゐるぢやありませんか。（7－141）

釈月性「将東遊題壁」（将に東遊せんとして壁に題す）の一節。

※全文は以下の通り。「男児立志出郷関／学若無成無死不還／埋骨豈惟墳墓地／人間到処有青山」。

晴川歴々たり漢陽の樹、芳草萋々たり鸚鵡の洲、（中略）「わが郷関何れの処ぞ是なる、煙波江上、人をして愁へしむ」（7－142）

崔顥「黄鶴楼」の一節。

▼参照＝鈴木二三雄「太宰治と中国文学（二）」（前掲）

※全文は以下の通り。「昔人已乗白雲去／此地空餘黄鶴楼／黄鶴一去不復返／白雲千載空悠悠／晴川歴歴漢陽樹／芳艸萋萋鸚鵡洲／日暮郷關何處是／煙波江上使人愁」。『唐詩選』に収録されている。

帆影点々といそがしげに江上を往来し、（中略）更に北方には漢水蜿蜒と天際に流れ、（7－142）

●「この描写などは、格調の高い漢文調を現代文に取り入れ流麗な文体をなしているのであるが、ここに崔顥「黄鶴楼」（中略）および李白の「黄鶴楼送孟浩然之広陵」と題した「故人西辞黄鶴楼　煙花三月下揚州　孤帆遠影碧空尽　唯見長江流天際」の詩を合わせみる時、これらの詩想と詩語が渾然として文章と調和し、格調の高い優れた文章になりきっていることに驚くのである。」

▼鈴木二三雄「太宰治と中国文学（二）」（前掲）

「お伽草紙」

春宵一刻、値千金、（7－153）

蘇軾「春夜」の一節。

※全文は以下の通り。「春宵一刻直千金／花有清香月有陰／歌管楼台声細細／鞦韆院落夜沈沈」。

▼参照＝長谷川泉「瘤取り(3)―太宰治―（近代文学の鑑賞・三十）」（「國文學」一九六七・五→『日本文学研究資料叢書　太宰治』一九七〇・三、有精堂）。

むすめ島田で年寄りやかつらぢや
赤い襷に迷ふも無理やない
嫁も笠きて行かぬか來い來い
（中略）
大谷通れば石ばかり
笹山通れば笹ばかり（7－161）

「ウタ　阿波はよいとこ蜂須賀さんの／御威勢踊りで夜が明ける／ハヤシ　娘島田で年寄りや鬘ぢや／赤い襷に迷ふも無理やない／嫁も笠きて行かぬか来い〳〵／ウタ　徳島育ちで踊り子姿／ぞめき流しで町々へ／ハヤシ　大谷通れば石ばかり／笹山通れば笹ばかり／猪豆喰うてホーイホイ〳〵」（『日本地理風俗大系』第六巻（一九三〇、新光社）

※阿波地方の盆踊り（阿波踊り）の歌詞。

是は阿波の鳴門に一夏を送る僧にて候。さても此浦は平家の一門果て給ひたる所なれば痛はしく存じ、毎夜此磯辺に出でて御経を読み奉り候。磯山に、暫し岩根のまつ程に、暫し岩根のまつ程に、誰が夜舟とは白波に、楫音ばかり鳴門の、浦静かなる今宵かな、浦静かなる今宵かな。きのふ過ぎ、けふと暮れ、明日またかくこそ有るべけれ。（7-166）

謡曲「通盛」の一節

「これは阿波の鳴門に一夏を送る僧にて候。さても此浦は。平家の一門の果て給ひたる處なれば痛はしく存じ。毎夜此磯辺に出でて御経を読み奉り候。唯今も出でて弔い申さばやと思ひ候。／磯山に。暫し岩根の待つ程に。暫し岩根の待つ程に。誰が夜舟とは白波に。楫音ばかり鳴門の。浦静かなる今宵かな浦静かなる今宵かな。／すは遠山寺の鐘の声。此磯近く聞え候。／入相ごさめれ急が給へ。／きのふ過ぎ。／けふと暮れ。／明日亦かくこそあるべけれ。」（『大日本文庫　文学篇　謡曲選』一九三六・七、春陽堂書店）

●「この詞章は、「日本古典文学大系」本（岩波書店）の「謡曲集」上の「道盛」によれば、字句の異同がある。（中略）太宰の文は、短くなっており、（中略）防空壕のなかで参考書なしに書いたとすることとの関連の存するところである。記憶に頼ってしるしたとも見られるが、あるいは意図して、短く刈り込んだとも思われる。」

▼長谷川泉「瘤取り(3)―太宰治―（近代文学の鑑賞・三十）」（前掲）

苅薦の
乱れ出づ
見ゆ
海人の釣船（7-170）

柿本人麻呂の和歌「飼飯の海のには好くあらし刈薦の乱れ出づ見ゆ海人の釣船」（『万葉集』巻三（256））の一節。

▼参照＝佐佐木信綱編『新訓万葉集　上巻』（一九二七・九、岩波文庫）

カゴメ　カゴメ
カゴノナカノ　スズメ
イツ　イツ　デハル（7-242）

童謡「かごめかごめ」

※地方によって歌詞が違う。広島高等師範学校附属小学校音楽研究部編『日本童謡民謡曲集』（一九三三・六、目黒書店）には、「籠目　籠目／かごの中の鳥は／いついつ出やる／夜明けの晩に／鶴と亀とすべった／「後の正面誰れ」」（千葉）、「かごめかごめ　かごの中の鳥は／いつでてあそぶ　よあけごろに／あかつきかけて　なにをかつぐる／たれがうしろ」（富山）、「かごめ　かごめ　籠の中の鳥は／何時出て遊ぶ　夜明けの頃に／暁かけて　何とか告ぐる／コツケラ　コツケラ　コツケラコ」（愛知）などが掲載されている。本文中には「スズメ」が出てくるのは仙台に伝わる歌詞だとされているが、確認はできなかった。

「パンドラの匣」

富士の山ほどお金をためて毎日五十銭ずつ使ふつもりだとか、馬鹿々々しい、なんの意味もないような唄ばかりなので、（7-292）

※都々逸「富士の山ほどお金を貯めてそれをチビ〳〵使ひたい」か。

▼参照＝黒岩涙香選『定本俚謡正調』（一九二八・九、交蘭社）

末は博士か大臣か、よしな書生にや金が無い（7-327）

※都々逸だと思われるが、出典は未詳。

乱れ咲く乙女心の野菊かな（7－337）

※太宰治の自作。

露の世は露の世ながらさりながら（7－337）

小林一茶の俳句

コスモスの影をどるなり乾むしろ（7－339）

※太宰治の自作。

相見ずて日長くなりぬ此頃は如何に好去くやいぶかし吾妹（7－344）

※太宰治の自作。

みちの芝が人に踏まれても朝露によみがえるとかいう意味の、前にも幾度か聞かされた都々逸であるが、（7－361）

※「土手の芝人に踏まれて一度は枯れて露の情けでよみがえる」（泉鏡花「辰巳巷談」、「新小説」一八九八・二）か。

太宰治全集第八巻（担当：内海紀子）

「親といふ二字」

親といふ二字と無筆の親は言ひ。この川柳は、あはれである。（8-9）

『俳風柳多留』七篇三九丁表。『俳風柳多留拾遺』拾篇一〇巻六丁表。

▼参照＝有元伸子「「親といふ二字」論―太宰流・人情噺の創作―」（山内祥史編『太宰治研究14』二〇〇六・六、和泉書院）

※有元伸子は、『俳風柳多留』ではこの川柳に前句「しわいことかな〳〵」が付されていることに注目し、「小説冒頭におかれた川柳には、「しわいことかな〳〵」という柳多留本来の金銭がらみで生活臭ただよう滑稽みをおびた前句の印象から「あはれ」の情趣への変換、ないしは、まぬけで滑稽な味と「あはれ」（哀れ／情趣）との二重の重ね合わせがなされた」と指摘している。

「苦悩の年鑑」

人道主義。ルパシカといふものが流行して、カチユウシヤ可愛いや、といふ歌がはやつて、ひどく、きざになつてしまつた。（8-77）

カチューシャかわいや　わかれのつらさ／せめて淡雪とけぬ間と／神に願いを　ララ　かけましょか（島村抱月・相馬御風作詞、中山晋平作曲『カチューシャの唄』一九一四年）

※一九一四（大正三）年三月二六日、劇団芸術座が第三回公演として帝国劇場で『復活』（トルストイ原作、島村抱月翻訳・脚色）を上演した。明治末期以降のトルストイへの関心の高まりを背景に、『復活』は大ヒットし、主演の松井須磨子が歌う劇中歌「カチューシャの唄」とともに一世を風靡した。

▼参照＝下川耿史・家庭総合研究会編『明治・大正家庭史年表』（二〇〇〇・三、河出書房新社）

●「新劇が劇中歌ともいえる歌を持ったのはこの舞台がはじめてだが、まず学生街にひろまった『カチューシャの唄』は、やがて学生が帰郷しても歌ったことから全国的に愛唱された。流行歌の鼻祖である。同時に須磨子の扮装を真似てカチューシャ髪が流行し、カチューシャの名をつけた櫛やかんざしやリボンが指輪が売り出された。新劇がひろい範囲で風俗に流行をおよぼしたのは、『復活』が空前絶後だろう。」

▼大笹吉雄『日本現代演劇史　明治・大正篇』（一九八五・三、白水社）

この一戦なにがなんでもやり抜くぞ、といふ歌を将軍たちは奨励したが、少しもはやらなかつた。（8－81）

此の一戦　なにがなんでも　やりぬくぞ（大政翼賛会標語、信時潔作曲）

※日本放送協会のラジオ放送『国民歌謡』が、一九四一年二月より『われらのうた』と名称を変え、「大政翼賛の歌」「さうだその意気」「アジアの力」など大政翼賛会が募集制作した楽曲を放送した。さらに日米開戦後の一九四二年二月には『国民合唱』と改称し、「此の一戦」を放送する。

▼参照＝吉田裕・森武麿・伊香俊哉・高岡裕之編『アジア・太平洋戦争辞典』（二〇一五・一一、吉川弘文館）

●「『国民合唱』は一九四二年二月に始まり、最初の曲目は「此の一戦」だった。これは『国民歌謡』同様のスタイルで放送されたものであり、四五年八月の「戦闘機の歌」まで九十余曲が放送された。そして放送だけでなく『われらのうた』で放送された楽曲とともに、大政翼賛会や情報局による国民教化運動にも活用され、上からの国民動員の一手段として機能していくのであった。（中略）『国民合唱』で最初に放送した曲「此の一戦」は、しかしながら放送直後に痛烈な批判を受けることになった。これは「此の一戦、何がなんでもやりぬくぞ」という政翼賛会制定の標語に曲をつけたものだが、カノン形式の楽曲に対し大衆が歌うことができるのかという批判や、標語を「詩」として扱う限界が指摘されていた。」

▼戸ノ下達也『音楽を動員せよ　統制と娯楽の十五年戦争』（二〇〇八・二、青弓社）

「冬の花火」

（清蔵）（中略）あなたは歩きながら、山辺も野辺も春の霞、小川は囁き、桃の莟ゆるむ、といふ唱歌をうたつて。

（数絵）ゆるむぢやないわよ。桃の莟うるむ。潤むだつたわ。（8－126）

※出典不明

※三輪義方作歌、ペリニー作曲「祝歌」の、「山辺も野辺も、かすみわたり。／花わらひ、鳥うたふ。／君が代の、春の日に。／桂を折えし、我友の其光栄。／おもへばその身の、光栄のみか。／御代の光、御国の栄。／花も鳥も、祝へやいはへ。」（山田源一郎編『女学唱歌』一九〇一・九、共益商社）の一節を用いて太宰が自作したものか。「祝歌」はヴィンチェンツォ・ベッリーニ作のオペラ『ノルマ』中の歌曲。

（清蔵）（中略）島田の小説の中にこんな俳句がありました。白足袋や主婦の一日始まりぬ。（8－129）

※太宰の自作句か。

※「白足袋」「足袋」は冬の季語。「子は唱ふ母の白足袋光るとき」（中村草田男『万緑』）、「白足袋遺し泣くほか寝るほかなかりしか」（中村草田男『万緑』）、「白足袋にいと薄き紺のゆかりかな」（河東碧梧桐『碧梧桐句集』）、「白足袋に褄みだれ踏む畳かな」（杉田久女『杉田久女句集』）などがある。

▼参照＝大岡信監修、日本うたことば表現辞典刊行会編『日本うたことば表現辞典』⑥生活編―上巻（二〇〇〇・三、遊子館）

「春の枯葉」

はる、かうろうの花のえん、
めぐるさかづき、影さして、
ちよの松がえ、わけいでし、
むかしの光、いまいづこ。（8－170）

春高楼の　花の宴、／めぐる盃　かげさして／千代の松が枝　わけ出でし、／昔の光、いまいづこ（土井晩翠作詞・滝廉太郎作曲『荒城の月』一九〇一年。引用は教育芸術研究会編纂『明治女学読本』巻五　五版、一九一〇・一一、同文館）

●「この詩の持つ世界が、『滅び』に対する愛惜の念と『滅び』が持つ独特の美への憧憬を人びとの心に掻き立て、日本人の根底に流れる美意識に訴えて多くの人の心をとらえてきた。」

▼上笙一郎編『日本童謡事典』（二〇〇五・九、東京堂出版）

●「「春の枯葉」もまた、〈むかしの光、いまいずこ〉という、「荒城の月」の朗唱から始まっていたことを思い返してみてもよいだろう。この二つの戯曲（引用者注・「冬の花火」と「春の枯葉」）はいずれも、滅び行く戦時共同体への郷愁を語るという、「戦後」のタブーに触れるモチーフに発していたのである。」

▼安藤宏『太宰治論』（二〇二一・一二、東京大学出版会）

※小森陽一は、『荒城の月』の歌詞にあらわれる主体が、宴の「盃」を回す共同体の複数性を帯びつつ、「むかし」を回想する人の姿としては限りなく透明化していると指摘する。この曖昧化された複数性の問題が、戦後社会の歪みを描く「春の枯葉」において、主体の単数性と複数性の葛藤として現出しているとみる。

▼参照＝小森陽一「『春の枯葉』論―独話の対話性／対話の独話性」（「國文學」一九九一・四）

（菊代）（中略）はる、かうろう、も、それから、唐人お吉も、それから青い目をした異人さんといふ歌も、みんなあたしが教へたのよ。（8-180）

「はる、かうろう」は『荒城の月』の一節。

「唐人お吉」は西條八十作詞、佐々紅華作曲『唐人お吉小唄（明烏編）』（一九三〇年）もしくは西條八十作詞、中山晋平作曲『唐人お吉（黒船編）』（一九三七年）をさす。

「青い目をした異人さんといふ歌」は出典不明。野口雨情作詩、本居長世作曲の童謡『青い眼の人形』（一九二一年）に、「青い眼をしたお人形は　アメリカ生れのセルロイド」という一節がある。また、野口雨情作詩、本居長世作曲『赤い靴』（一九二一年）に、「赤い靴はいてた女の子　異人さんにつれられて　行っちゃった／横浜の埠頭から船に乗って　異人さんにつれられて　行っちゃった／今では青い目になっちゃって　異人さんのお国に　いるんだろう」という一節がある。

▼参照＝上笙一郎編『日本童謡事典』（前掲）

※『青い眼の人形』『赤い靴』は異国情緒漂う童謡であり、「青い目」を「異人」すなわちアメリカのメタファーとみる共通点がある。太宰はこれらの童謡の歌詞を混ぜ合わせて編集したか。

※『荒城の月』は滅びの美を歌い、『唐人お吉（黒船編）』は領有される者の悲哀を歌詞に込め（「雨よ降れ降れ降るアメリカに／どうせ乾かぬ　この袖たもと」）、『青い眼の人形』『赤い靴』は異国＝アメリカとの遭遇を主題にしている。これらの歌曲が『春の枯葉』に盛り込むものは、敗戦によって日本が「滅亡」し、「日本の隅から隅まで」アメリカに「占領」されたという現実（「冬の花火」）への厳粛な注視であろう。

（野中）（中略）

あなたぢや
ないのよ
あなたぢや
ない
あなたを
待って
ゐたのぢやない

といふ歌を知ってゐるかね。これはね、「ドアをひらけば」といふこの頃の流行歌だがね、知らんのか、君は。

（8－193）

※出典不明

※安藤宏は、「冬の花火」と「春の枯葉」に、「〈青い目をした異人〉に我が身を犠牲にした「唐人お吉」の歌」「〈あなたぢや／ないのよ／あなたぢや／ない／あなたを／待つて／ゐたのぢやない〉という流行歌」が描き込まれたことに注目し、「この二つの戯曲はその当初から、占領軍へのあからさまな反発を秘めた、「反・戦後」的なモチーフに依拠していたのである」と指摘する。

▼安藤宏『太宰治論』（前掲）

●「どうしてそんなに太宰に魅かれていたのだろう。（中略）教員になりたての、新制の早稲田の高等学校の学園祭で「春の枯葉」をやるというので、事前に手渡された稽古台本で、「あなたぢや／ないのよ／あなたぢや／ない／あなたを／待つて／ゐたのぢやない」に出会って、これだ、これだ、――これで太宰に引き回されたのか、と思ったりした。太宰治は敗戦直後の日本を実感し、体現し、代弁したことになるのだろう。」

▼保昌正夫「太宰治私記―浅見淵氏のことなど」（『太宰治全集』第10巻月報9、一九九九・一、筑摩書房）

「親友交歓」

山川草木うたたあ荒涼

十里血なまあぐさあし新戦場

しかも、後半は忘れたという。（8-244）

山川草木転荒涼／十里風腥新戦場／征馬不前人不語／金州城外立斜陽（乃木希典「金州城下作」一九〇四・六）

▼参照＝岩崎文人「『親友交歓』論―井伏鱒二にふれて―」（山内祥史編『太宰治研究14』二〇〇六・六、和泉書院）

※岩崎文人は、津島修治名義のエッセイ「将軍」（「蜃気楼」大正一五年六月号）に言及し、乃木将軍の遺物展覧会で彼の凡庸な日常生活の一端をかいま見た「僕」が、それまで乃木将軍に対して抱いていた頑固な「ヤカマシ屋」のイメージを捨てて「人間」として懐かしさを感じるエピソードから、「偉人に関する評価の逆転という図式」を読み取り、「『親友交歓』の木村、神崎、韓信の例と類縁のものでもある」と指摘している。

●「金州城下作」通釈…山川草木　転（うた）た荒涼／十里　風腥（なまぐさ）し新戦場／征馬前（すす）まず　人語らず／金州城外　斜陽に立つ

山も川も草も木もすべて砲弾の跡なまなましく、満目ただ荒れ果てた光景である／十里の間、風もまだなまぐさい新戦場である／わが乗る軍馬も進もうとはせず、傍らの者も一様に窮して語らない／かくて夕日傾く金州の城外に、しばらく茫然とたたずんだことである

「金州は大連（現在の中国旅大市東部を占める）の東北にあり、日露戦争の際の南山の激戦地。しかも作者の長男勝典戦士の場所。明治三十七六月七日、ここを訪れて作った。」

▼猪口篤志『日本漢詩鑑賞辞典』（一九八〇・七、角川書店）

「男女同権」

「こぞの道徳いまいづこ」といふ題の、多少、分別顔の詩集を出版いたしましたところ、一ぺんで私は完全にダメになりました。（8-250）

「われに告げてよいづくの辺りに／羅馬のあでびとフロラはありや／アルシビアダは　また　タイスは／いづれ劣らぬ人の美の双璧なりしが。／水面に立ちてひとのよばはば　いらへを返へす／その姿この世のものとも見えざりし／エコもいづくぞ、われに告げてよ。／さあれ古歳の雪やいづくぞ」（フランソワ・ヴィヨン「そのかみの美女を歌へるバラード」、佐藤輝夫訳『大遺言書』一九四〇・三、弘文堂書房）の一節をもじったものか。

※佐藤春夫の詩集『魔女』（一九三一・一〇、以士帖印社）に、「カリグラム　尋ね人新聞広告文案」と題し、「こぞの　雪　いまいずこ（春）」の一行のみからなる詩がある。ヴィヨンの「さあれ古歳の雪やいづくぞ」によそえて、「春（春夫）」が思いを寄せる女性（「雪」）の行方を捜し求めて新聞に出す尋ね人広告の文案という意匠である。この詩を太宰は念頭に置いていたかもしれない。

「メリイクリスマス」

「トカナントカイツチヤツテネ、ソレデスカラネエ、ポオツトシチヤツテネエ、リンゴ可愛イヤ（中略）」（8-299）

赤いリンゴに　口びるよせて／だまってみている　青い空／リンゴはなんにも　いわないけれど／リンゴの気持ちは　よくわかる／リンゴ可愛や　可愛やリンゴ（サトウハチロー作詞、万城目正作曲、仁木他喜雄編曲『リンゴの唄』一九四六・一、日本コロムビア）

※戦後初の企画映画として一九四五年一〇月に封切られた『そよかぜ』（松竹大船）の主題歌および挿入歌が『リンゴの唄』である。映画の主役を演じる松竹少女歌劇団の並木路子が歌って人気となり、一九四六年一月に戦後最初のレコードが発売された。「戦後はリンゴとみかんから始まった」とも言われ、『みかんの花咲く丘』（川田正子歌唱）とともに、終戦直後の日本の焼跡と復興を象徴する歌である。

▼参照＝日本歌手協会編『流行歌の歩み―日本歌謡大全』（二〇一四・一、日本歌手協会）

「父」

宗吾郎が、いよいよ直訴を決意して、雪の日に旅立つ。わが家の格子窓から、子供らが顔を出して、別れを惜しむ。ととさまえのう、と口々に泣いて父を呼ぶ。（8-353）

三代目瀬川如皐作の時代世話物『東山桜荘子』（ひがしやまさくらぞうし、近年では『佐倉義民伝』としても上演される）の一場面。江戸前期の下総国佐倉藩領の義民、佐倉宗吾郎は、領主の厳しい年貢取り立てに苦しむ農民の訴えを聞き、村々を代表して決死の覚悟で直訴に挑む。家族に別れを告げる「子別れ」の場面は、雪の降りしきる景色と義太夫の語りが愁嘆場を盛り上げる。佐倉宗吾郎は歌舞伎の他、講談にも描かれた。

▼参照＝冨澤慶秀・藤田洋監修『最新　歌舞伎大事典』（二〇一二・七、柏書房）

太宰治全集第九巻（担当：斎藤理生）

「斜陽」

昨年は、何も無かった。／一昨年は、何も無かった。／その前のとしも、何も無かった。（9-38）

※本文では「そんな面白い詩が、終戦直後の或る新聞に載ってゐた」と続いている。しかし調査の限り、「朝日新聞」「毎日新聞」のような全国紙にこのような詩は載っていない。太宰が目にする可能性が高かったと思われる「東奥日報」にも掲載されていない。太宰の自作詩か。

「ご無事で。もし、これが永遠の別れなら、永遠に、ご無事で。バイロン。」と言ひ、それから、そのバイロンの詩句を原文で口早に誦して、私のからだを軽く抱いた。（9-110）

Lord Byron「Fare Thee Well」

●松山敏訳『バイロン名詩小曲集』では「妻と別れるに際して」という題で、「おゝ　さらば！　永久に、／何時までも御機嫌よう、」と訳されている。

▼松山敏訳『バイロン名詩小曲集』（一九二六・一一、緑蔭叢書）

「おさん」

お隣りのラジオがフランスの国歌をはじめまして（9-174）

フランス国歌「ラ・マルセイエーズ」

女房のふところには／鬼が棲むか／あああ／蛇が棲むか（9-175～177）

近松門左衛門『心中天網島』

●青木京子は、「あああ」という部分について「義太夫の節回しを覚えてい」た太宰が加筆したのではないかと推測している。また、「太宰の読んだ近松の「浄瑠璃全集」の特定は難しい」としつつ、その可能性のある主要文献を

挙げている。

▼青木京子「「おさん」の女性像」（『太宰文学の女性像』思文閣出版、二〇〇六・七、一二一―一二二頁および一四四―一四五頁）

「犯人」

その下には紺碧にまさる青き流れ、／その上には黄金なす陽の光。／されど、／憩ひを知らぬ帆は、／嵐の中にこそ平穏のある如くに、／せつに狂瀾怒濤をのみ求むる也。（9-204）

レールモントフ「帆」。奥沢文朗、西谷能雄訳『レエルモントフ』（一九三九・九、白水社）所収

●津島美知子「書斎」（『回想の太宰治』二〇〇八・三、講談社文芸文庫、七二―七三頁）に「三鷹駅近くの古本屋で購入」したと記載がある。

●斎藤理生は、右記の『レエルモントフ』に収録されているカ・イ・アラバジン著「レエルモントフ」の中に引用として出て来る「その下には紺碧にまさる青き流れ／その上には黄金なす陽の光／されど憩ひ知らざる帆は／狂乱を希むること切なり／嵐の中に安逸のあるが如くに。」に基づいていることを指摘しつつ、「レールモントフの詩を反芻する過程で、「鶴」の心はしだいに詩の言葉に規定されてゆく」と述べている。

▼斎藤理生「「犯人」の言葉」（『太宰治研究15』二〇〇七・六、和泉書院）

「酒の追憶」

「わたしや／売られて行くわいな」といふお軽の唄をうたつた（9-217-218）

『仮名手本忠臣蔵』

●遠藤伸治には、「「お軽の唄」をうたってその度に転倒する「私」の姿は滑稽であり、酒を飲みなれない頃に酔っ払ってひっくり返った経験のある者ならば誰しも、身に覚えのある微笑を浮かべて読むだろう」という指摘があ

る。

▼遠藤伸治「太宰治「酒の追憶」論―その演戯性について―」（『太宰治研究15』二〇〇七・六、和泉書院）

「渡り鳥」

おもてには快楽をよそひ、心には悩みわづらふ―ダンテ・アリギエリ（9-270）

『改訂　上田敏詩集』（一九三五・一二、第一書房）

●津島美知子「書斎」（『回想の太宰治』二〇〇八・三、講談社文芸文庫、七三頁）に「古本屋で購入」したと記載がある。

●馬場重行は、「エピグラフに、既にこの作品の主要なテーマ設定は露わにされている。「おもて」と「心」、「快楽」と「悩み」、「よそひ」と「わづらふ」というようにこのエピグラフには対峙する二項が明示されているが、それはそのまま一編の主題に重なる」と指摘している。

▼馬場重行「「渡り鳥」論―批評する〈ことば〉」（『太宰治研究16』二〇〇八・六、和泉書院）

●細谷博は、「冒頭のダンテの詩編「新生」によるエピグラフ「おもてには快楽をよそひ、心には悩みわづらふ」も、芥川龍之介が好んで引いた、大燈国師の句に白隠が付したという「君看双眼色、不語似無憂」に通じる格調ある暗さを感受することもでき、また、同じ句が卑近に語られた「桜桃」のように、自嘲や気取りと見て楽しむこともできるのである」と指摘している。

▼細谷博「「渡り鳥」と堀口大学訳ヴァレリイ『文学論』―笑いと切実―」（『太宰治研究23』二〇一五・六、和泉書院）

「人間失格」

してその翌日も同じ事を繰返して、

昨日に異らぬ慣例に従へばよい。
即ち荒つぽい大きな歓楽を避けてさへゐれば、
自然また大きな悲哀もやつて来ないのだ。
ゆくてを塞ぐ邪魔な石を
蟾蜍は廻つて通る。（9-376）

『改訂　上田敏詩集』（一九三五・一二、第一書房）

●『渡り鳥』の項と同じく、津島美知子「書斎」に言及がある。

●三谷憲正は、ギイ・シャルル・クロオとその詩に触れつつ、「この詩は確かに前半部では「世間」で日々を無駄に送っている「人人」の様子を描いているものの、後半部では一転して「しかし、君、もし本当に生きてゐたいなら、／其日其日に新しい力を出して、／荒れ狂ふ生、／御せられまいとする生にうち克たねばならぬ。」と歌い、生活を「馬」に喩えて読む者を叱咤し、「宝玉は鉱石を破つて光る。」と結んでいる。明らかに後半部に力点が置かれ、前半の「蟾蜍」と後半の「馬」が対比されているのである」と指摘している。そのうえで、『改訂　上田敏詩集』にはもう一編、「蟾蜍」を歌った詩が訳出されている」として、トリスタン・コルビエェル「蟾蜍」に触れ、『上田敏詩集』に登場する二匹の「蟾蜍」。それぞれの詩で占める役割は異なりながらも、互いに呼応し合って二匹で一つの「蟾蜍」へと収斂していく。葉蔵がまるで自分を名指しされたかのように「顔を燃えるくらゐ赤く」するのはコルビエールの「蟾蜍」のイメージ、即ち「頭を円めた、翼の無い詩人」、さらには天上界にいて妙なる声で歌うはずの鳥「迦陵頻伽」がなんと汚れた「溝」にいるという存在のあり方に照射されていたからではなかろうか」と述べている。

▼三谷憲正「「人間失格」と『上田敏訳詩集』」（『太宰治研究23』二〇一五・六、和泉書院）

無駄な御祈りなんか止せつたら
涙を誘うものなんか　かなぐりすてろ

まア一杯いかう　好いことばかり思出して
よけいな心づかひなんか忘れつちまひな
……
みんな聖経をよみ違へてんのよ
でなきや常識も智慧もないのよ
生身の喜びを禁じたり　酒を止めたり
いいわ　ムスタツファ　わたしそんなの　大嫌ひ（9-381）

堀井梁歩訳『ルバイヤット　異本留杯耶土』（一九四七・五、南北書園）

●津島美知子「書斎」（『回想の太宰治』二〇〇八・三、講談社文芸文庫、七二頁）に「寄贈本」であったと記されている。

●中島国彦は、『人間失格』に引かれる順は、堀井訳の章数では、49、55、26、82、31、36、44、83、84、72、90であり、完全に太宰は訳本を手元に置き、気に入ったものからピックアップして行った」ことを明らかにしている。そのうえで、「「不安」「恐怖」「正義」「罪」といった、『人間失格』の中に繰り返し出て来る観念語が、この『ルバイヤット』引用の中に見られる」ゆえに、「こうした詩句のいくつかの語句は、太宰にとって、一種の触媒として作用した」と想定する。ただ、「「引用」すればするほど、作品は本来の流れを分断され、見せかけの複雑さ、重層性しか生み出さないのではなかろうか」と問い、作品に即して考えれば、「こういう形でしか手記を葉蔵が残せなかったこと、つまり引用を挿入して自己の過去を語らざるを得なかったことの中に、葉蔵の矛盾、悲劇が存在したように思う」とする。

▼中島国彦「「人間失格」への一視点―「引用」の機能」（「國文學」一九九一・四）

●『ルバイヤット』を書いたオマール・カイヤムとその日本語訳については、九頭見和夫「「人間失格」と堀井梁歩訳『ルバイヤット　異本留杯耶土』」（『太宰治研究23』二〇一五・六、和泉書院）にくわしい。

ここはお国を何百里、ここはお国を何百里、と小声で繰り返し繰り返し呟くやうに歌ひながら（9-403）

「戦友」（真下飛泉歌、三善和気曲）

▼『標準軍歌集』（一九三二・一〇、野ばら社）などに収録

●東郷克美は、続く部分と合わせて「これらの哀切をきわめる歌声が、帰属すべき故郷を見失って流離する魂の嘆きを示すものであることはもはや明白であろう」とする。

▼東郷克美「「人間失格」の渇仰」（『太宰治という物語』二〇〇一・四、筑摩書房、二七九頁）

こうこは、どうこの細道ぢや？（9-404）

▼わらべうた「通りやんせ」。『世界音楽全集』第一三巻（一九三一・一、春秋社）には、「本居長世作詞」として掲載されている。

●塚越和夫は、「この「童女の歌声」に、私はひき込まれるようなわびしさ、悲しさを感じ、暗然とする。ああ、太宰治という作家は、こんなにも人間のわびしさ、悲しさを噛みしめ、描くことができた人なのか。そんな感嘆詞付きの感慨が私の胸中を去来する。しかし、冷たく突きはなして眺めると、このわびしさ、悲しさとは、何と日本的な湿度の上に成立していることだろうと思う」とする。

▼塚越和夫「人間失格」（『評釈太宰治』一九八二・八、葦真文社、二四四頁）

●東郷克美は「ほかならぬ「童女」の声であることが、すべてを浄化する「雪」の描写とともにきわめて暗示的だ。この童女の歌声は、「津軽」における竜飛の童女が歌う手鞠歌を連想させるが、それが「幻聴」である分だけ、葉蔵の故郷からの離反を物語っているだろう」とする。

▼東郷克美「「人間失格」の渇仰」（前掲、二七九頁）

「グッド・バイ」

唐詩選の五言絶句の中に、人生即別離の一句があり、私の或る先輩はこれを『サヨナラ』ダケガ人生ダ、と訳した（9－419）

▼于武陵「勧酒」

●中村三春は『竹青』における引用と合わせて『訳注唐詩選』上下（岩波文庫、昭6・5）か」とする。しかし『グッド・バイ』の「作者の言葉」に限っては、「或る先輩」の訳だと書いていることから、井伏鱒二「中島健蔵に」（「作品」一九三五・一〇）からの引用と見るべきであろう。「勧酒」は、『グッド・バイ』が執筆された時期とも重なる一九四八年五月に河出書房から刊行された『詩と随筆』にも収録されている。

▼中村三春「太宰治引用事典」（『太宰治事典』一九九四・五、學燈社、一一〇頁）

太宰治全集第十二巻（担当：小澤純）

「負けぎらひト敗北ト」

子守の唄（12－34）

不明。

※「この家の小守」による「同じ唄」であり、故郷の退屈さを象徴するか。

長篇小説 「無限奈落（むげんならく）」

調子の良い読経（12－173）

不明。

※津島家の菩提寺である金龍山南台寺は浄土真宗大谷派。主要な浄土三部経は、「大無量寿経」・「観無量寿経」・「阿弥陀仏経」。

「掌篇鈴打」

累ぢやヤあるまいし、そ、そんな夜明け近くまで寝ずに亭主を待つてるやうな御内儀がありますかい。（12－233）

●住吉直子「「掌篇鈴打」論」（山内祥史編『太宰治研究10』二〇〇二・六、和泉書院）は、「本文には、歌舞伎「伊達競阿国戯場」の「埴生村の場」、義太夫浄瑠璃節「伊達競阿国戯場」の「第八」、「第八」の後半を新内化した「鬼怒川物語」の「かさね身売の段」、各々の本文との共通点や類似点」があり、「浄瑠璃の本文による可能性が高い」とする。

「哀蚊」

富本のお稽古（12－248）

富本節。

※浄瑠璃の一派で初代富本豊前掾が一七四八年に創始。

老松やら浅間やらのむせび泣くやうな哀調（12－248）

「老松」と「浅間」（「其俤浅間嶽」）は富本節の主な演目。

「花火」

安来節の美声団といふものの一座（12－255）

安来節は島根県安来市の民謡で大正期を中心に流行した。「どじょう掬い」等。

労働歌なんか呶鳴りやがつてる（12－256）

不明。

※労働時に歌う仕事歌とは違い、労働歌は労働者や農民など働く人々が、社会変革への意志をこめ、団結して闘争する時に歌われる歌。

「長篇地主一代」

富本でこなれた渋い声（12－272）

富本節。

※浄瑠璃の一派で初代富本豊前掾が一七四八年に創始。

老松やら浅間やらの、むせび泣くやうな哀調（12－272）

「老松」と「浅間」（「其俤浅間嶽」）は富本節の主な演目。

美成団とかいふ安来節の一座（12－279）

安来節は島根県安来市の民謡で大正期を中心に流行した。「どじょう掬い」等。

「長篇学生群」

浪花節は……乃木将軍……（12－381）

※浪花節（なにわ）は浪曲（ろうきょく）ともいう。江戸後期に形成され明治時代に発展した語り物。乃木希典を扱う浪曲は様々にレコード化され、後に浪曲トーキー映画「乃木将軍」（池田富保監督、日活、一九三五）も公開されている。

散りても後に香を残す乃木御夫婦の潔き、か。（12－381）

●浪曲師・京山小円「乃木将軍」（一九一二年）の一節であると、R・J・リフトン、加藤周一『日本人の死生観』（一九七七・五、岩波新書）が指摘している。

※『古今和歌集』巻第一春歌上四八よみ人しらず「散りぬとも香をだにのこせ梅の花こひしき時の思ひでにせむ」を踏まえ、また、乃木の和歌「色あせて木ずゑに残るそれならでちりてあとなき花ぞ恋しき」（年代未詳）とも響き合う。